

Kodak Gray Scale

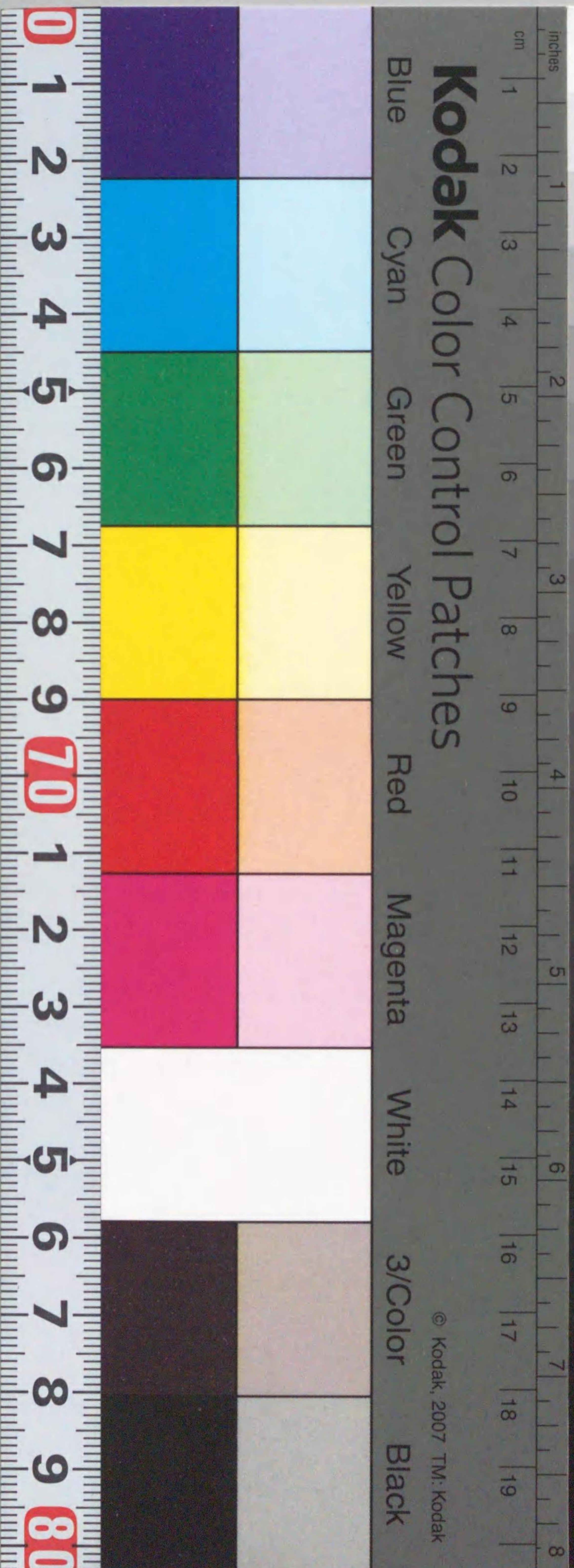
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



K4

增補雅言集覽

九

813.6
I 6199
NMS

813.6
I 619g
Vno



691325

増補雅言集覽卷之九

石川雅望集
中島廣足補

○登の部

^{俗のドウシ又ドシ}
 〔とち〕といへる同一神功紀十うは人のうまひと奴知年へぬるとち源玉葛三
 年へぬるとちこそ心かいてむつびよりけれ老人ドウシ女どち同空蟬三女どちの
 とやりある夕やまの二りきどち同夕顔二冊いづれも一りきどちよてこれどち
同四た、われどちと若らせで物かといふりきおもとの侍るを枕二ノよき不
 とよてたちいづとて車どもの方かど見おこせてこれどちいふ事も何事からんとお
 ずめよき人の御中どち源うき舟六よ死人の御中どちさるべきどち同をどめ六廿
 忍びてさるべきどちの給ひて大宮をのららと聞え給ふさるまどきどち同帯木二冊
 さほまどきどちの女文よ云々思ふどち万五ノ梅の花今さりりなり意母布度知
 かざ一よしてか今さりりあり土佐日記六帖三たてばとつゝぬれまさるる吹
 風と波と思ふどちよあるらん源夕霧十七いりからんと思ふどち云々俗の思ヒ
ウシの意ふて夕霧のもお万八四思共十りき思んどち六帖四一を、一み草の
 なじ心の人々をいへる也万十二思共十りき思んどち六帖四一を、一み草の

枕のせきくとも思えんとちの旅へぬべし千代のとち(土佐日記)「見わたせば松

比うれでとよすむ鶴の千代のとちとぞ思ふべらなる俗のツレの意あり千代を共ふ

思ひとち是ハ物の一つならぬを共思ふ意也(源 かりつば) 廿うへも御門をかざりなき御思ひとちま

源をも藤つやをもいづれも大切おおやし給ふ意なり

とち杵(山家) 下「山深みいもよと、る水とめむりつゝ」落るとちひろふと

とちむ果す意也俗の仕舞(源 あふひ) 卅八けふよとちむまとき事をれど又なく物

かかしとちむる(同 さのき) 四十はのそ廿日の布とされバ大方の世の中とちむるそ

らのけしきよつけても**とちめん**(同 末つむ) 七「かねつきてとちめむこといさげ

あてこさへまうたぞりつゝあやあきとちめてん(同 空蟬) 初よ死すとまかくてとち

めてんと思ふ物から

○**とちめ**是ハ体の詞ハ俗のシマヒ まどりのとちめ(源 よこぶえ) 八まどりのとちめ

をりう薫れるけしきかと 云々目ノサマ **花のとちめ**(新撰六帖) 六衣笠「ひつ川の

岸は匂へるかほさくらちるこそ花のとちめありけれ **世のとちめ**(源 わるな) 十九上七思

ひとある、世のとちめよ文かきて御方よ奉れ給へり **今のとちめ**ハシヨギハナリ **(同 橋姫) 卅**

今のとちめよあり給ひていさ、りの給ひおく事の侍りしを(狭) 四、中、今、今、の、とち

めよも参りてあされかりし御けそひをさへ聞侍りしとちめの事トハハ送葬

の事を(源 うけるふ) 十とともかくてもねをといふりひかさなれどとちめの事をし

も山賤のそしををさへおふかんこ、のさめよもからき 云々 **補**(源 若菜) 下けふよと

ちむるかそこのけしきもあまたくさる、夕風(同 楨柱) 九人のたえそてん

さまを見えて、おもひとちめんも今こそ一人わらへと(頼政)「木がらしの風れた

つまでやころびぬきくこそ花のとちめありけれ

とちめ是ハ物をぬふ(永久) 未發花 「ねづつりかぬひのとちめやまさくららんまど不

ころびぬ山櫻りか(枕) 五、十三ゆさけのりこの御身をぬひつるが 云々 とちめもあへ

せまどひおきてさちぬるよ。 前のひつ川の云々の哥も櫻の皮よ とちて

とちこもる とちつくる のたぐひ とづ 閉綴の所

補とちいと(雅亮装束抄)とちいとかどをひき、をてふくらめ

どり鳥 とりのね(瀨松) 三鳥の音さよのつねなるハ聞ゆべうもあらぬ世界(同)

同鳥の音たよあまやりの聞えぬ山ふところようづもれて **とりのこゑ**(同) 同時よ

あさぐひたる花の色鳥の聲をもわが身おそ心よ見そやす人なく **とぶ鳥**(同) 同ふ

く風とぶ鳥あつけて **山の鳥**(源 若紫) 廿二琴の所におそつくハ山の鳥もおどろり侍らん

〔濱松〕三、よしの、か、る身よの山の鳥おどのおかト事と思ひ侍れど 云々 〔とりけど

もの〕うつ不 〔とりあけ〕目よ見よゆる鳥けたもの 〔濱松〕三、か、は山の末よ鳥けたも

の、中よまどり給へるも 〔とりむ〕鳥と虫 〔枕〕五、鳥虫のひよひつきいとつつくう

てとびありくいとをり(同) 七、草も木も鳥虫も 〔同〕十二、木草鳥虫をも又虫とり

へり(狭) 卅二、とびりふ虫鳥のやうよゆきせりのをくせある人やのあらん 〔る〕つ

とふく なぞいへりすべて 〔とりあこ〕とあこ 〔とあこ〕鳥をとる 〔和名〕十五、爾雅云鳥罟謂之羅

度利(万) 十三、鳥網張(同) 四十七、等奈美波里 〔とりて〕鳥を

阿美(万) 十四、鳥網張(同) 四十六、等奈美波里 〔とりて〕鳥を

カゴ(和名) 十五、説文云笱 和名 鳥籠也 〔とりたバ〕鳥柴と名を 〔の所よ附そ

とり 是の雁鴨おど食 〔宇治拾〕二、九月ばりの頃かれバ此頃鳥の味ひいとさろ 〔鯉

いまさいでこほよき鯛のきいの物あり 云々 〔魚とり〕鯉とり 〔鯉とり〕鯉と 〔同〕同 〔さかト〕

き魚もさし鯉鳥おど用ありけあり(保元物語) 末いりよして魚鳥をとるぞと問へバ

云々 〔不鳥〕不の部よ 〔不鳥〕不の部よ

とり 鶏をさしてた 〔よととり〕よとととり 〔くさりけ〕あどそのうあ 〔催馬樂〕鶏鳴 〔鳥のさきぬて

ふ 云々 〔とりのね〕新勅 〔雑二 匡房〕「まどろまで物思ふやどのがき夜ハ鳥の終バりりう

れいさのさし(源 總角) 五、よととりもいづりよらあらん 〔のりよおとなふよ 云々

〔鳥のねも聞えぬ山と思ひしを 云々、家よつふ物ゆゑ 八里の遠き意也 〕 〔とりの聲(拾玉) 一 〕 〔若の、め

や關の岩門きりとちて鳥のこゑよも猶あけぬりか 〕 〔とりのそつね〕新勅 〔反哥〕「いく

りへりおきふし、てり冬は夜の鳥のそつねとさ、そめつらん(壬生) 上 〔神山のむ

つきのかりバ月さえて鳥のそつねよ御戸ひらくかり 〕 〔鳥の八聲〕新拾 〔雑中〕「のどか

ある老のねざめのさびいさふ鳥のやこゑをかぞへてぞさく 〕 〔八聲のとり〕壬生 上 〔あ

ら玉の千とせれ春のそつめとて八聲の鳥も千世いとふかり(夫) 廿七 忠良 〔くたのけハ

いづれの里をうりれきてまさよふりきよ八こゑをくらん 〕 〔鳥とともあおきて〕(夫)

七千五百昔の人のけふの曉し鳥とともあおきて(宇治拾) 七、あけぬれば鳥ととも

あおきてゆく程よ 云々 〔新續古〕雑下、常磐井入 〔いよへも近きねざめの袖のう

へよ八聲のとりは涙をぞりは(玉葉) 雑二、後深草 〔名よたて、八聲といへど明まつ

る程をかぎりよとりのかくなり(延文御百首) 〔かほく〕よつきを物思ふ曉を八聲

よてとやとりのなくらん(同) 曉眠易 〔曉の八聲のとりハ二聲とかりでや人をおど

ろりはらん

○ 〔とりあひせ〕闘鶏 〔和名〕六、玉燭寶典云寒食之節城市多爲闘鶏之戲 〔闘鶏此間云

〔禁秘抄〕下四 幼主時小鳥合 〔并 鶏闘常事也子細無定様又遣馬部吉上取小家小鳥

をきくや山がつのあやうき身もとり所ある(輔親)「うめが、此たまらぬおふ
ことのこぞ柴のとびらのとりどころある

とりどころ 是は俗い語鍋などのふとの(うつろ 藏開) 一 大いなる白うねのひさけ
トツテ又ツマミあどの意也

若菜のあつものひと鍋ふさよの黒方を大いなるかまらけのやうに作りくずめて
おろひさりとりとところよの女のひとり若菜つとるうをを作りたり

とりうち 鳥打(夫)十四 信實「鶉は秋の草ねのあづさ弓を鳥打の名こそするけき
鳥居(和名)十二 門戸類

とりる 鳥居(和名)十二 門戸類 考聲功韻云相。今之門雞栖也弁色立成云雞栖也鳥居(源
柳)四野の宮のさ物をかかけある小柴垣を大垣よて云々 黒木の鳥るともいさそがよ
まをいへるよ

かうとくくえとこされて云々 **稻荷のとりる** (詞花) 下いかりれとりるよかきつ
けて侍りける補(夫)廿 仲正「鳥るさつ逢ふ坂山のさりひある手向の神よ我いさめそ

とりのつりさ 鳥の子(新續古) 雜下後「このでろの鳥れつりさも告とえて我とお
どろくありつきの夢 雜をい

とりのこ 鳥の子。鶏卵(神代紀) 上 一 渾池如雞子(六帖) 四 「鳥の子を十つ、十なりさ
ぬとも人の心といふたのまん 友則十。(伊せ物)五十段 首の内。よ下句 思もぬ人を思ふ物り
とりのあと 鳥の跡。文字を(古) 序 まささのかづらをぐつとそり鳥のあとひさ

くとままれらば云々(源 かしは木) 八、病にふいかい給ふことのものつまきもなくあ
たる所よ やうき鳥のあとのやうよて(散木) 上五 「初雁のあきつるそらのうた雲を鳥の跡と
も思ひけるるな(夫) 卅二 家長「池よをむ鳥のあとさへ絶ぬらん氷る硯のこづぐれ未
補(枕) 八、心よくき所へつりればさおせがきかどとあやうき鳥のあとあどの
やうよのあどりのあらん

とりのせうえう (源 夕霧) 廿八鳥のせうえうのもの、やうあるいりよ人笑ふらん
養子といふ今い(枕) 五、あぢきなき物、とり子のかよよくさけある(發心
集) 廿一 壹岐前司親輔といふ人取子をしてをさきよれむ、とやうかひけり此
兒三つといひける年云々

とりの源 をどめ) 八とりゆの手つきいとどう作りたる物のこ、ちるぞ(孟津) 八
時左の手にて。なべての琴 又ゆきへり(源 ともみちの賀) 八(同 ありし) 廿(同 ありき)
緒を押ふる也。にいへり 下廿五四十二
なぞお見ゆ

とりのめ 雀盲(和名) 三、病源論云人至暮不見物世謂之雀盲 俗云度 謂如鳥雀瞑則
無所見也

とりのい 鳥柴(夫) 五 仲正「つれもあき人の心をとりのいよこがねのき、そつけ

えて一がを

とり 此とりと上に添ていへるお二様取る意なるも又たゞ助語にろへるもあま
なりとどへははひうちさしなど、同例也されどかろく添へたるもとは取る
意より出たるなれば二様かよはして **とりい** 取入 **とりいれ** (源) 五御文をり
いふべきも多し猶味ひていへるべし

りとりいれかどし侍るめれと御りへりへ更し聞えさせ給ふ折はりあん(枕)四ノ
くさ物ひろきもちひかどを物とりいれてとらせたるよ云々

とりいれ 是ハ次のとりとめと類語にて物のけのれ(源) 廿御物のけのさびくと
もふま、お打ふるまひくるしむるをいふ(源) 五御物のけのさびくと
りいれ奉りしをおせいで云々(同) 夕霧 六例のさとりいれさるあめりとして加持参りさ
さげととりいれ(榮) 一さだの御物のけのけいさかど例の事をり
云々ともすればよるひるさけとりいれし奉れも

○**とりいづ** 取出 **とりいで** (うつね 忠こそ) 二此帯ときぬ十むらあまりとどとり出
て云々(竹とり)文せりき置てまうらん戀しからん折々とり出て見給へ**とりいでん**
(源) 五、そのうさをとり出んえらびよ必もるまどきいとりたりや**とりい**
たさん(同) 九まことのうつねものどあるべきをとりいたさんよいかさるべし

附 **とうで** 右のとりいでといふべき折よの(同) 四例のいづくよりとうで
みうくいへるもあり音便なり(同) 五、四例のいづくよりとうで
給ふことのもよりあらんあせしらるるさけし給ひつくまべりめ

れど(同) やとり木 八十 此折のきよらより又いいつくのえと一きついぞのあら
んとおせいでとうで給へるあめり

○**とりそづ** (落く) 四 とりそづいて落くぞといひたらん何りひがとたらん(源
夕顔) 四十 とりそづいてい人よあさむりれぬべき(同) 六(廿わがかくもてあ
そめたれバこそ春宮の御事をもおせいでけさめれとりそづいてたゞびとの御をく
せあらバ(同) 上 百八いさけあき御ありさまあまはおのづからとりそづいて見
奉るやうもありあんと云々、俗ももいヒヨットの意はトツハツツ(宇治拾) 二十五ノ
馬よのり給ふよよく臆しけるよや轡を二たびとりそづいて鐘をいきりよふそづい

補 (宇治拾) 六 とりそづいて海に落入ぬ(同) 七ノ紅のうちたるををかりを心かりり
ける御まへのとりそづいてやり水よれと入さりけるを

○**とりそあつ** 別々よトリ (枕) 六ノこれのととりそあちて聞こくべくもあらぬよ物
聲々のさじが (源) 十 とりそあち聞え給ひて大宮よぞあづけきこえ給へりけ
いさをいへり(源) 十 とりそあち聞え給ひて大宮よぞあづけきこえ給へりけ
る云々(同) 十 とりそあちていいうそくおそく物し給ふころおれどおまへよ
ていけおされ給ふもころ一ツキヘトリノケ (同) 十 北のささうどもとりそ
あちてとせりけさり障子をトリノケハ

障子をトリノケハ

障子をトリノケハ

障子をトリノケハ

障子をトリノケハ

障子をトリノケハ

障子をトリノケハ

障子をトリノケハ

○とりをらふ

取拂(かけろふ日記)七中下ひきたるせさうかどもをかちさぐり。たる

物どもミトくととりをらふ(狹)三上二此ころさふらひける所もとりをらひて紙障

子よよべの御ぞぞかんりけてさふらひつる出行いあとのさまをいへり

○とりをやま(枕)廿五家あるト

詞云々かといひてとりをやま此下わらびの手づら

つとつるかといへ(抄)馳走するさ

○とりあがま

取逃(盛衰)十三一段一番の手あひは宮とりあがま参らせたり高くらの宮

の御事也

○とりとむ

とむむる意也万いふべしとりとむる(古)上雜「とりとむる物よあらねば年月をあ

それあかうとをこつるをとりとめぬ(伊勢物)六十四段「とりとめぬ風よありと

も玉すされさぐるさばうひまもとむべき

とりとめて(盛衰)十八初段逃さらんとけ

るをとりとめて云々

○とりちらま

取散す(枕)七七日の若菜を人の六日よもてささぎとりちらまかど

するよ(源)かしは廿八いろくをつくりたる物ひさりでの心をへどもを云々と

りちらし何心もあきを

かナルのをさあき折の事也補(同)よこふえ六とりちらしくひかなぐりな

ど給へば

○とりこさ

取渡す(枕)四御佛名のあさ地獄繪の御屏風とりわさして宮よ御

らんせさせ奉り給ふとりこささる所取。こいある渡也。の敬語也(同)やとりき六十京の宮よとり

わささるべき物かとあらば御さうの人うしてあるべらんやうは物給へ

○とりわく

取分(源)幻三とづらとりこく心ざしよも物の哀れよらぬさざあり

○とりこさ

今いどりわけ(源)桐壺廿六とりわけおせとありて(同)もみちの賀九

かくとりこさ思ひ給へる御覚えのそと云々とりこさ(同)玉葛廿九上らふこく人

どもの中よとりこきて(枕)十六人の顔よとりこきてよと見ゆる處云々源前け

るふ九四十めのと、此人ふたりかんととりこきておぼたりも忘れがさくて(後

拾雜五大貳高遠「とりこきてわが身よ露やおきつらん花よりさきよまつぞうつろふ

とりこきたる(源)五ふひ五とりわけさる宣旨よて云々

○とりかへ

取替。体のカケガヘカとりりへあり源竹川廿四せめて人の御うら

みふりくいととりりへありておぼ(榮)衣の玉六子あくなさるたぐひおほりれ

どそれいととりりへもありのこりをもとてなぐさむらん

とりかへ(盛衰)四十六

土佐坊詞 とりかへもあき命を奉りて鎌倉をたち一日よりいきてかへるべきと存せ

附(同)四十三四段宗盛の

生れたれば女子あり音をせをいひせん

とて方くととりかへ子をたづねけるそとよ

○とりかへ 右お同、是の用の語也 とりかふる なごもい とりかへん ふべい とりかへて (万) 四十七 衣

しも多あらあん取易トリカヘて着てバヤ 云々(源花のえん)六 扇バりをあるしよとりかへて出給ひぬ (同 蓬生) 十 物きよけよしあるさましてかこつけかくとも

とりかへつべくとゆ 女房の侍従がさま姫君 とりかへで (同 東や) 四 日とよとりかへで契りしくれよぞおのしをめける

○とりかへ 取返也。是の常のこなへトリモドス意也 とりりへ みをつくり とりりへい (伊勢物) 六 聞つ

けてとめてとりりへい給うてけり (源 みをつくり) 十 とりかへいつべきこ、ちこそをれいりよとの給ふよつけても (注めれどにど覺つるいやくやしくと里くへさまやいさど也)

○とりりへ 右は同くモトヘモドス意なきど是の(六帖)六 とりかへは物よもがもやまて鳥のあけてくやいき物をこそ思へ (金) 惟上 「池よすむわが名ををいのと

りへを物よもがや人をうらと (源 うつせ) 十 とりりへを物あらねど忍びがさけれバ (とりりへい) (うつせ) 國ゆつり) 下 又とりかへい思ひいやうい 云々(源 桐壺) 廿七

おぞまぎる、折もありつるを昔の事とりりへいかあしくおぞさる (同 系合) 九 そのよの夢とおぞいさまは折なき御心どもよいとりりへいかあしうおぞい出らる

とりりへい (同 せきや) 三 ひりりの事忘れねバとりりへい (とりりへい) 七 物あそれあり

へされん (同 柳) 卅 とりりへされん物のやうよ とりりへさる、意よて俗のトツテカヘシノナルもの、やうよの意也

○とりりへ 是の上下を打かへる意也 (菅方) 下 「大虚を取返ともきりかく星歟砥見留秋の菊うさ

○とりか、る 俗と同く物をまか、る意也 (枕) 廿三 只今その御りへりごと 哥 奉らんとてとりか、るやとよ 云々(源 うけるふ) 四十 又宮の上 中) 君也 よとりか、りて戀しうもつらく

もわりなき事ぞをこがましきまてくやい (補) (宇治拾) 廿三 心もあらざらん人よとりかりて汝あやまちを (同) 笛をふきながら見りへりさるけいきとりか、はべくもおぞえざりけれバ

○とりかく 取隠す とりかく (源 と、き、) 四 ふりくとりかく (給ふべけれバ)

とりかく (同 夕霧) 五十 御ささきとやうの物い皆とりかく (とりかくせ)

(同 横笛) 六 かれとりかく (とりかくさん) (同 末摘) 卅 二人々参れバ 詞 とりかくさんや

り、るささい人のをる物よあらん (とりかくさる) (後撰) 雜 物のかまよさし置て出侍りける後つねあきらのとこよとりかく (さされて)

○とりか 取わが手のものおする意よてかふの飼又養の字の意也 (夫) 十八 「まか又草とみ物などとりあたるをもいふ鷹馬とよいへり (兼昌) 一 かりする野中のいづかけをみてとりか鷹のかげぞうつろふ (とりかひ) (大和物) 五

鷹のよるひるこれをあづりてとり々ひ給ふ事といふ^源給ひけんそら^給う
てけりとりかへ(催馬樂)「まなくさとりかへまゆと下め」とりかせん(神樂哥)其駒
「その駒ぞやこれいわれ草こふ草のとりかへん」とりかせん(源 夕霧)九くるを野の
さうちがからんまぐさあどとりかえせて

○とりかさぬ万物のあさなるをいふとりかさねて(源 あふひ)九ふさ、びの御さらへとりか
さねてあるべき(同 とき)三「身れうさをあけくはあらであくる夜のと
かさねてぞねもかりれける(同 松風)七秋の頃をひなれば物の哀れとりかさねたる
こ、ちして

○とりよる身を寄るなり此とりのことよか(源 東や)廿君もいとあらまよしく心かこ
くとりよりのけりと思ひけり

とりよせ取寄とりよせ(源 紅葉の賀)十御琴とりよせてひりせ奉り給ふ(枕)十七
文をもてきこり皆終たるは火ちりくとりよせてこれバとりよせ(源 蓬生)七
かどとりよせ給へ(同 横笛)十とりよせさせ給ひて(落く)一そのぬひさした
るまらまのまへまづぬひ給へといへをとりよせてぬひてこのぬひものを手あとり
たるよて引寄てといふ
どの事也かる
く見るべし

とりよろふよるふの所お出す

補 とりよそふ(万)廿三とりよそひ門出カトををれば

○とりたがふ取違とりたがへ(枕)十八さてとかくも御うへりのあくてそらあ
る和布のまををつ、みて給へりうバとりたがへさるまといふ

○とりたて、たて、好むたてたる事などいへるお同く万専ら
まなし行ふ意なりとりあろくそへたる也なり九の部あいせ源 桐壺三
とりたて、まかト^十御うしろまかければ(同 明石)十そのまぢあてとりたて、
つたふる人あ(同 藤そのま)十四わりき人々の例のさるまよき事をもとりたて、め
であへり(同 常夏)十とりたて、よいとあかけれどとりたてさる(同 名合)初 前齋
宮の御参りの事云々とりたてさる御うしろをまよとおせられど(同 若菜)上ノた
りき位よも定まり給ふべりり人のとりたてたる御うしろともおせせ

○とりそふ取添とりそへ(同 若菜)上六とりそへおせよとりそふるともし取そへて
ふべし

(古) 賀 「わがよそひ君が八千代よとりそへてとめおきては思ひ出ませよ(源 葵)
四十さらぬ折ごもある御けいきとりそへていと心ぐるけかり(同 玉葛)四十櫻の
糸をかがよつや、りあるかいねりとりそへては姫君の御料ありとりそへん(同 とき)
き、四十七かろト^十き名さへとりそへん(補 躬恒)「秋は野の花のいろくとりそ
へては衣手ようついでが

補 とりよそふ(万)廿三とりよそひ門出カトををれば

○とりたがふ取違とりたがへ(枕)十八さてとかくも御うへりのあくてそらあ
る和布のまををつ、みて給へりうバとりたがへさるまといふ

○とりたて、たて、好むたてたる事などいへるお同く万専ら
まなし行ふ意なりとりあろくそへたる也なり九の部あいせ源 桐壺三
とりたて、まかト^十御うしろまかければ(同 明石)十そのまぢあてとりたて、
つたふる人あ(同 藤そのま)十四わりき人々の例のさるまよき事をもとりたて、め
であへり(同 常夏)十とりたて、よいとあかけれどとりたてさる(同 名合)初 前齋
宮の御参りの事云々とりたてさる御うしろをまよとおせられど(同 若菜)上ノた
りき位よも定まり給ふべりり人のとりたてたる御うしろともおせせ

○とりそふ取添とりそへ(同 若菜)上六とりそへおせよとりそふるともし取そへて
ふべし

(古) 賀 「わがよそひ君が八千代よとりそへてとめおきては思ひ出ませよ(源 葵)
四十さらぬ折ごもある御けいきとりそへていと心ぐるけかり(同 玉葛)四十櫻の
糸をかがよつや、りあるかいねりとりそへては姫君の御料ありとりそへん(同 とき)
き、四十七かろト^十き名さへとりそへん(補 躬恒)「秋は野の花のいろくとりそ
へては衣手ようついでが

補 とりよそふ(万)廿三とりよそひ門出カトををれば

○とりたがふ取違とりたがへ(枕)十八さてとかくも御うへりのあくてそらあ
る和布のまををつ、みて給へりうバとりたがへさるまといふ

○とりたて、たて、好むたてたる事などいへるお同く万専ら
まなし行ふ意なりとりあろくそへたる也なり九の部あいせ源 桐壺三
とりたて、まかト^十御うしろまかければ(同 明石)十そのまぢあてとりたて、
つたふる人あ(同 藤そのま)十四わりき人々の例のさるまよき事をもとりたて、め
であへり(同 常夏)十とりたて、よいとあかけれどとりたてさる(同 名合)初 前齋
宮の御参りの事云々とりたてさる御うしろをまよとおせられど(同 若菜)上ノた
りき位よも定まり給ふべりり人のとりたてたる御うしろともおせせ

○とりそふ取添とりそへ(同 若菜)上六とりそへおせよとりそふるともし取そへて
ふべし

(古) 賀 「わがよそひ君が八千代よとりそへてとめおきては思ひ出ませよ(源 葵)
四十さらぬ折ごもある御けいきとりそへていと心ぐるけかり(同 玉葛)四十櫻の
糸をかがよつや、りあるかいねりとりそへては姫君の御料ありとりそへん(同 とき)
き、四十七かろト^十き名さへとりそへん(補 躬恒)「秋は野の花のいろくとりそ
へては衣手ようついでが

補 とりよそふ(万)廿三とりよそひ門出カトををれば

○とりたがふ取違とりたがへ(枕)十八さてとかくも御うへりのあくてそらあ
る和布のまををつ、みて給へりうバとりたがへさるまといふ

○とりたて、たて、好むたてたる事などいへるお同く万専ら
まなし行ふ意なりとりあろくそへたる也なり九の部あいせ源 桐壺三
とりたて、まかト^十御うしろまかければ(同 明石)十そのまぢあてとりたて、
つたふる人あ(同 藤そのま)十四わりき人々の例のさるまよき事をもとりたて、め
であへり(同 常夏)十とりたて、よいとあかけれどとりたてさる(同 名合)初 前齋
宮の御参りの事云々とりたてさる御うしろをまよとおせられど(同 若菜)上ノた
りき位よも定まり給ふべりり人のとりたてたる御うしろともおせせ

○とりそふ取添とりそへ(同 若菜)上六とりそへおせよとりそふるともし取そへて
ふべし

(古) 賀 「わがよそひ君が八千代よとりそへてとめおきては思ひ出ませよ(源 葵)
四十さらぬ折ごもある御けいきとりそへていと心ぐるけかり(同 玉葛)四十櫻の
糸をかがよつや、りあるかいねりとりそへては姫君の御料ありとりそへん(同 とき)
き、四十七かろト^十き名さへとりそへん(補 躬恒)「秋は野の花のいろくとりそ
へては衣手ようついでが

○とりつらふ 取遣(源須磨)四十とりつらひ給へるてうとゞも(宇治拾)十三親し申
さで物をとりつらひ 云々

○とりつたふ 取傳(源東や)八か、は御文かどもとりつたへとめけ
れど(宇治拾)七侍とりつたへてとらま 云々

○とりつゞく 取續(うつ不國もつり)下内よりかづけ物きんどちとりつゞきて出
給へり 打つた人をいふ (源こてふ)九さはべきうへ人ともろくとりつゞきてと
らへばよさぶ 補(万)九ノとりつゞきおひゆきければ

○とりつあぐ 取繫。此とるい捕(堀川)季「とりつあぐ人やならん春の野よいは
ゆる駒れあゝ毛あるりあとりつあげ(催馬樂)呂あを馬をあらばとりつあげ 云々

とりつあがる(後拾)雜五「そあれてもろひこそなけれあを馬のとりつあぐれい
とが身と思へば

○とりつづく 取付(宇治拾)廿八あぶ蜂むぐでとりけくちあそかど、出て目鼻ともい
そはひと身よとりつきてさせとも 云々(盛衰)川の所よ是よとりつけとて弓の筈を

さゝ出さる 補(万)廿三わり草のつまとりつぎ 云々(同)卅から衣をそよとりつぎを
くこらを

○とりつづく 取次(源タウヤ)廿三御かゆかといそぎ參らせたれどとりつづく御まらあ
ひ打あひそとりつぎて(同東屋)四此御方よとりつぎて 少將の文を浮舟のさるべき

折しつらふ 取繕(同とし姫)五とりつくるふ人もあきま、よ草あせやうよけ
り 云々(著聞)八十九いよよささととりつくるふべからせ

○とりあらず 取直す(源夕顔)四十とが心のま、よとり直して見んよあ
つらうくおやゆべき(同かけろふ)十ありよさまかどそこいとりあらずつ、か
りきこえ給ふ(同末つむ)廿三火とり直しかうよあちていれ奉る(平治)十九大衆俄

よ長刀をとり直しあまをまととて追りけ、き 補(同藤のうらと)五くちをくこそ
おくりまけれとりあらず給へよときこえ給ふ

○とりあらず 取雙ぶ(同とらあらぶる)ふべし(同とらあらべ)同と、き、(六今一とびと
りからべてこれを(同系合)十繪のさまももろこしと日の本とをとりからべて

補とりあきさは 無鳥鳥(夫)和泉「人もかく鳥もなからん鳥よてい此うそなりも君
を尋ねん(無名草紙)源氏かどうせ給ひて末の世よ鳥あき鳥のかうなりとりやして

○とりあらず 取成。執行ふのとりあてなその事カラをつくるふ意也俗と同く大方いよ
ささまあとりつくるふ意也但しういひなすをいへりそれい俗

といさゝら(枕)七ノ十四、清の竹を此君といひ何ともおもひでいひ出侍りて行成

たがへり(枕)を興せさせ給ふところ五朝臣のとりかへりたるよ侍らんと申せばとりかまるとも打よませ給へり(源

霧五哥云々とやとりかまべからん(夫)廿六、言語の部「さゝもあらぬ時雨かれども

玉りいのことよとりかまよの音々(源東屋三ひりりく終ちけさるやうよ

とりかま人もあらん(源未摘十さやうをるすまひする人の物思ひりた

るけしきさき木草をらのけしきよつけてもとりかへりかどして心もせれりり

らる、折々あらんことを哀あるべけれ(同つね八をこめきたる事もことくく

とりかへりさ(同東屋五十右大將の常陸の守の娘をかんよほふなほなほもとりか

へてんをや(同未摘廿二見ていかななどおせとけさやりよとりかさん

もまゆゆ(同とりかせば(同さ、き、十あまり情まひきこめられてとりかせばあど

めくこれをさすめのかんとすべり(同ささる(同そま三物の聞えやまといりよど

りなされん

補とりむく 取向(方)十三、ぬさとりむけてこれのこえゆく取手向

とりう 取得 どりえぎ(竹とり龍の首の玉とりえげりかへりくかどの給へり(同とり

うる どりえん などもいふべし

○とりういふ 取失 どりういふ(盛衰)十一段、らんは鬼といふ鬼京中よちち

て十歳以前のをささきもの十が八九のとり失はれければ(云々)とり失ふ(云

○どりのく 取除 どりのくる(ともいふ)どりのけ(枕)十二、さて後、袖几帳かどどりの

けて思ひ直り給ふめり(万いふべし

○どりおろす 取下す(枕)五、とくかきて参らせ給へ(云々)御硯とりおろして詞とくく

た、思ひめぐらさで(云々)とせめさせ給ふ(御前より(同)五、廿、清をも此下わらびの

手づからつとつるあといへ(清答云々といへりとりおろして(云々)とてとりおろし

かひささぐ(是もわらびを次(かけろふ日記中廿七日、わり行ひさる夢よわが

らをとりのろしてひさひをさくと見る(髪をサ(枕)七、むとくある物髪をとりき人の

かつらとりおろして髪けづる(かづら(俗いふカモシなりるをとりさるあり

○どりのく 取置 どりおろす(万いふべし

ちとまりて人の御さめもいとをいからんさりいらよこれをとりおきけんよあど

もりき、給へんこそもづりけれ

○どりのく 執行(續千神祇 山階寺の別當よて代々のあとよかへらぎとり行

ひて(云々)万いふべし

十一

十一

○とりあへせ 取合す(瀆松)一若君のさま 后中納言の御ありさまを一つよとりあへせたる顔つきして

とりあへて 取取てよて物のとり調ひ。合の字の意からねど義訓お譯すれば俗の(源少)四青きりの紙よくとりあへてまぎらひくいとる(同 松風)廿こ、

はのまうけの物もさふらひざりければ大なるよごさとからぬまうけの物やといひつ

ういたりとりあへたるよごさひてまらせさり(同 くてふ)九ろくとりつゞき

てさらべよたぶ鳥よはさくらのやそかぎ蝶よ山吹がさね給るかねてよもと

りあへたるやうあり(同 けうと)三小うちぎりさかりさるをそかぎのひとがみつ

うらろろとるをとりあへるま、よかづけ給ふ(狭)三ノ下 四十一 とりあへたるま

さぐひつ、そそかぎこうちぎどもをそ出させ給へるとかりづけささせ給ひけり

とりあへける(蜻蛉日記)中、中御「供の人とりあへけるよをたがひて京のう」印本

て此文字を ちの御ありきよりのいとそくかりつると云々

○とりあへせ 不取取。是の手は取る意よていそぐ折(伊勢物)百七 ちと

よぬれてまどひよけを 歌云 ともてやれりければ籠も笠もとりあへで 俗の

ずら 取る物もとりあへせ(盛衰)十六 遷あてささきてとる物もとりあへせ

○とりあへせ 是の不取取かろく添へたる。不取取の二様ともすべて不取取は同く俗の

猶豫モナクコラヘタモタヌ意也花のちるも涙のこぼる、も年の過行か(源 さま)五高

ども皆同意也俗よハスグサマ早速の所よいひて用ぬさまいさ、か異也(源 さま)五高

ちよといふ物よあんとりあへせ人そこあはる、といきけと 高潮防さかたく とりあ

へせは(盛衰)十三八段高倉の宮忍びて俄よ とりあへせり、事かれ御所中かどの

とりした、むるよ及まは 思ひモウケズ猶 とりあへぬ(源 さま)三 一つれなき

をうらもえてぬちの、めよとりあへぬまでれどろりまらん 猶豫のデ(兼輔)十一春

ふかくちりりふ花をりせよもとりあへぬものハ涙かりけり とりもあへせ(古)上

「さうさまよ年もゆるあんとりもあへせ過るよとひやともよかへると(紫式部集)

櫻を花がめよさしてとるよとりもあへせちりけきバ(狭)四ノ下 顔よ涙のとりもあ

へせろろくとこぞれか、まバ とりあへ給ひせ(源 あふひ)五 ちもろき御涙ハまいて

とりあへ給ひせ(大和物)三三 「ちねとてやとりもあへせハやらなる、いといき

がたまこ、ちこそをせ(源 梅枝)九 「心ありて風をよくめは花の木よとりあへぬま

でふきやよるべき

○とりあつむ 取集 とりあつむる ともい とりあつめさせ(蜻蛉日記)中上 あまこ若

苗のおひさるをとりあつめさせて 常の取集むるをうく動 とりあつめ とりあつめて

か、いふべき事勿論也

曾補雅言集覽 卷之九 十四

とりあつめさる

是ら何ヤカヤトサマノナル意也同意(源 夕顔)九きぬこの音云々

そらとぶ鷹の聲とりあつめて忍びぐたき事おそり(同 舟)柴つとふねの所く行

ちがひさるあど外まてのめかれぬ事どものとりあつめさる所かれバ(榮 松のつ

え)鶯の聲もへる雁のひまきもとりあつめことさらのやうある旅のそらかり世

中のささめあきまつけてもかくそりかくてややとんととりあつめてあけき給

ふよ(同 明けまき)五「山里れあれしらは、聲くよとりあつめさる朝ほらけあ

(同 藤のうら葉)三 かさちあどさ今いとさきさくりは終びゆきてとりあつめめで

き人の御ありさまあり(同 夕霧)二御袖のあさりもなよひりまけちかういとさる句

ひあどとりあつめてらうさげよ云々。是ら何ヤカヤノコル所ナキ意也

○とりあらそふ 取争(源 東や)二のこりのたから物をやうト侍る所くひとつまでも

又とりあらそふべき人あり

○とりあぐ 取舉 とりあけ ともい(枕)廿六をそのうき葉の云々ひろを

りたさよひてありく云々 とりあけて物おつけなど見るもよよいとらうをり

(更科日記)物まつきてとまりさるをこれを反故かりとりあけてこれを云々補(宇

治拾)七八 とりあけて打ふるひけれさ

○とりあやまり 此どりの助語にて誤りて(源 夕顔)四十忍びてどの給へれどとり

あやまりて少将も見つけてわれかりけりと思ひあへせばさりと罪ゆるしてんと

思ふ御心おどりぞあいかりける(同 梅ヶえ)廿 とりあやまりつ、見ん人のさか心

よりあひ忍せん事かさきふありとも云々是も同思フコタカヒタル意也

○とりあやまつ 是の取損じ(同 忍のな)下六よりどの御え妻をもとりあやまちて事

のきこえあらんよ

○とりさく 取避(同 かけろふ)廿五日といふ朝座の御堂のうざりとりさけ御

いつらひあらさむるお妙どりのとりさくるともい

○とりさこゆ 取聞ゆ。前のとり申(蜻蛉日記)下九今二日をうりありてとり聞ゆべ

き事ありおほいませとのさかきてまよさきあり文の。此詞此外もあるべけ

○とりみどり 取亂(源 朝顔)三 とりみたりいとまなくなどして

○とりあさ、む たり認むともい俗の(落く)一 打ちら給へる物どもとりあ

さ、むとりあさ、め(かほろふ日記)中十九四日出さつ云々 心あささうく思ひつ、

物とりあさ、めあとするよ(源 さむらひ)十皆かきいらひよろづとりあさ、めて御

車どもよせて云々(同 夕霧)五十女の御心ひとつよご御身をとりたさめ(同 玉
葛)初 さしもふりき御心ざしかりけるをさよおとあぶさきととりたさめ給ふ
御心ががさなりけれさ

○とりたさで、(古事記)上十九於下枝取垂白丹寸手青丹寸手訓垂云云(神代紀)上廿
懸青和幣白和幣相與致其祈禱焉(皇極紀)七令國內巫祝等折取枝葉懸掛木綿(方)六卅
木綿取之泥而(同)九卅長歌齋戸木綿取四手而忌日つ、(宣長云垂をシテと訓ムハ志陀禮
世ハ四手といふ物の此用語(神樂哥)さあき「榊葉よゆふとりたさで、こが代より神の
を体語よして名とせる也

御室と本いそひそめけん(夫)九法印「けふいそやゆふとりたさで、夏麻のをふの川
瀬よそそぎしてけり(新六帖)一家「いたづらよをふの麻比そとりたさで、ことよも
たけぬとあ月のそら(堀川)季「君がためゆえこのまぬをとりたさで、神よぞまつは
万代迄よ(夫)卅三「年ひさよゆえこの帯をとりたさで、神よぞまつる妹よあそんと

○とりもつ 取持(方)十九山吹の花執持て云々(同)四十「たつり弓手取持て朝獵
よ云々(神樂哥)八ひらでせ手よとりもちて(後拾)長能「白妙のとよとてぐらをと
りもちていそひぞそむる紫の野よ。神樂採物歌といへるも神補(方)十八「おそ
きこのまきのまよととりもちてつらふる國の云々

○とりもて 奪ふの意の取よてツレユク とりもていぬ とりもてまりる(源)うけるふ八
鬼やくひつらん狐めく物やとりもていぬらん(同)一姫)四よからぬ人の心をつけ
とりけるが人をとりもちて西の海のまてまでとりもてまありよりりばとまもて

来る(同 手習)五 狐こたははやうの物にあざむきてとりもてきさらんよこそあらめ
とりもちて とり執行ふのとりもちの持の字の意よて其事を専よ主と
てな一行ふ意あるべし是ハ俗のトリモチといへるお同くアツカヒセワス
ル意(方)十七四長哥 大君のまことりこをを國の許等登里毛知底是も官事を
なり(源)合)初 前齋宮の御参りの事云々 大方の事どもいとりもちて親めき聞え給
ふ(同 夕霧)五十かくて御法事よろづとりもちてせさせ給ふ(同 藤のうら葉)三

を經あどの六條院よりもせさせ給へり宰相の君のましてよろづをとりもちてあ
れよいとあまつりうまつり給ふ(同)終 御わざの事どもそつとくくの給ひ
おきつる事をかりけれハ大將の君をんとりもちてつらうまつり給ひける(同 蜻蛉)

五卅かの殿のかくとりもちて何ややとおぞしてのこりの人をそぐ、ませ給ひても
猶いふりひかき事を忘れがさくお平を(枕)十四心づきを死物云々女、まよさかく
いへとニク、思そひつきてねんぞろがは女いさ、心あしをといへハ常よりもちの
くふして物くせいとそいがり云追従とりもちてまどふ(枕)六四とりもてる物

十六

よて二つ出たれど
意儘の聞えがふし

補 とりまへ (拾) 雜秋よみ「秋野の花の色々とりすべて我衣手ようついでいかな

○とりまへ (源 若菜) 卅七 あやしく人のさえさくかくとりする事ども物のもえあ

りて(契沖云)人々の心くよまごひて或は手かき哥よみ琴和琴びもかどひく事也
一事を執する意也。 雅望案するにどと申す
のどとに同くや

○とりまへ 取捨 とりまへ とりまへさせ (枕) 四ノ三十、雪人のよくが

りてとりまへ侍るよや 云々 まことよハ 云々 侍どもやがてとりまへさせしぞ 云々 卅

かきまてよあぞ仰でと侍りしりと申せば(源 夕顔) 廿六 見る人もくるしき御ありさは

とまこしとりまへてまやと思くらべられ給ひける(同 行幸) 九 いと御こ、ちのあやま

しさもとりまへてらる、こ、ちしておきる給へり

とる 取。とるの手にとるをはじめにいていづれもわが物にする意也万にいへり今見

とりて とれる とらん ぶれもろよのいふべし どり入りよ どり捨つ といふる迄二

ねいへるの皆 ○執採乗 ぶれもろよのいふべし どり入りよ どり捨つ といふる迄二

前出つ ○執採乗 ぶれもろよのいふべし どり入りよ どり捨つ といふる迄二

もいへりおして味ひいるべし(盛衰六)見ゆ

○とらる とらる、 とられ 所取也。又敬語よこ、よまへへ。うけとるこひとるよびとる

傍近くよび むりへとるたづねとる待とる聞とる のたぐひ上のり

○とらせ とらせ とらしむ 命取也。一つ とりて の所出。ぐ事をとるといへるの俗語也

とる 取。是の弓矢筆盃燭早苗さぬのそそ。手をとるを とらへて ともい とらふ の所あ

るべ (千載) 神祇 経衡 「うでさかく千代をぞいのるいとや山とる神葉の色かへせして(盛

衰) 廿四 多くの人の中よえらされさる弓矢とる身の面目あり とりて (兼盛集) 中將

かそらけとりて物かづく(頼實集) 云々 かのらけとりてよまける哥 云々 (蜻蛉日記)

下四 太刀とくよとあれば大夫とりてそのこよ片ひさつきてるさり(源 浮舟) 六十 馬

よのせんとそれと更さきりねばさぬのそをととりて立をひゆく(宇治拾) 十二 矢を

まけて射んとて 云々 猶あやかりければ矢をまづして火をとりにてまへ(同) 廿三

庭は雀のまありさけるを童部石をとりにてうちたれば とりしとれども (古) 秋 上 三

のふこそ早苗とりしついのまよいかをよきて秋風のふく(新拾) 時光 「時をえ

てちこの村人いくちさびとれどもつきぬ早苗あるらんとれば (万) 卅一 「ゆふけと

ふこが衣手よおく露を君よとせんと思ふ(つれ) 七段 筆をとれば物

か、れ樂器をとれを音をさてんと思ふ(云) さいをとれば攤うたん事を思ふとれ (竹

とり) 此奉る文とれといひてこれハ 手よとる とられぬ 不所取也。畢ぬ とられぬ

もあらせんと 云々子の道綱の妻にと思ふ意也例して(源 紅葉の賀) 四舞の師ども

かと世よあべてからぬをとりつ、云々からひけるとる とりつる とりのる (落く

不) 二 かしくくもとりつるうあこれいさいもひありかと思ふやうあるとる せむを

る哉 云々 聲とり 詞也 給へるとの給への(枕) 二 家ゆせりてとりとるとる せむのこせ

りぬる 云々 (同) 十三 いとどうちさて、とる せむとるよ(盛衰) 十八 兼隆をぞとる せむとる

べき由けいやくしてける 此頃 せむに とら せむ(盛衰) 廿 家安主の二人とら

陣をとる(同) 廿一 やき下といふ所陣をとる 云々 宿とる や せむとる(更科日記)

日山のもよか、りよさり今やとれとて人々あがれて宿もとむる 云々 (源

うや) 卅 あどてかくさうあきやとりつるぞ(宇治拾) 九 郡のつりさよやと

をとれり

とる 取。是と捕ふる意也(拾) 物名「そ鷹のをきゑよせんとかまへるおあめが

そあ鼠とるべく(盛衰) 一獅子をとる大臣もあり 云々 あれとる虎をとるものもあり

けり 云々 池の汀の鷺をとりのる藏人もあり 云々 朝威をおもんとて怪鳥をとる事を

えさり(保元物) 廿六 いうよして魚鳥をとるぞと問へばとらば(うつや 藤原の君) 雲

雀のそ鳥これをいけてをとりよてとらばおおくの鳥出来ぬべしとればとられて

(長秋詠藻) 下「ミちのくれあらの、牧の駒さよもとれればとられてなれぬく物を

とられト(宇治拾) 廿四 今よも鳥よとられトとて雀の事也 打とり(同) 廿六 十

りの女のありけるが虫打とりぬさりけるよ 云々 組とれ射とれ 敵を打とる

とる 是の人を擒 とりて (万) 六 一「そこそくの軍ありとも言擧不爲取而可來男とぞ

思ふとらざらん(盛衰) 卅五 段内田殿をら左右よりよせて左右の手を引それ家吉

中よりよつてかどり巴をとらざらん。大方 平人を捕 召捕擧捕生捕又手捕ま せよ

(平治) 中 少く 軍物語に多し といへる と 奉る 是の貴人の御身をわが手に受

るを敬えて(盛衰) 十六 式部卿の宮をとり奉りて東國へおもむき 云々 位よつけ参ら

せんと 云々 (同) 十三 八段 宮をとり奉りて土佐のそさへ流し奉るべしとぞ定められける

(同) 卅五 五段 法皇をとり参らせて 云々

とる 取。是の奪ふ意也 とりて とら せむ とら せむ とら せむ (拾) 上 づりさとられ

て侍りける時 云々 (榮花山) 八 大納言の大將をとり奉り給ひて治部卿よあし奉り給

へり(伊勢物) 十二 女をばとりてともよめていよけり(枕) 五 三 づまとの里人よと

られさるよやあらんわがとりさるよやいづれもをり(著聞) 卅一 云々 家の畠よそ

バむぎを植て侍りけるをよる盗人よあ引てとりさりけるを聞てよめは「盗人の長

物ヲヤリ **とらせ** **とらせて** **とらせり** (枕) 九 哥 云々 とわか、く、かきてとらせ

テ使ヨラシヤ (源 夕顔) 四 枝も情かけなめる花をととらせされバコナタル也 **補**

(詞花) 下 人の一ひをとらせて侍ければよめる **とらせ給ふ** (源 よこふえ) 廿 かの宮の

萩の宴せられける日おくり物よととらせ給へるかりけり **とらせり** (拾玉) 四

「まづいさひたがとがかれや物をもさバ人よのこをとらせさ身 **とらせぬ**

(枕) 四 うぶやいさひうはのさあむけあどの使よろくとらせぬ **とらせ**

○ **とりて** 是の一つの詞にて俗に **とせて** の所おま。是の他人他國他事他日

リタルヲ専ら もいへると同意也常の **身よとりて** (源 わかな) 上 廿六 身よとりてのことよもあるまづく思給

へさち侍るをり、あるを **國よとりて** (瀧松) 一 國よとりての **大臣よて** (同) 同

日本よとりて 云々 **此方よとりて** (源 夕霧) 五十 げは此方よとりて思給ふるよ

此方といけ **時よとりて** (盛衰) 二十七 かやうの事の時よとりて上手ならせりか

ふま **同** (同) 廿六 時よとりてゆ、いさ高名あり 之文字あり **同意也**

とるり 俚言のドコトテト (源 と、き) 五 **とる方** くくちをいさ死をという

かりとおほゆばりせぐれさるとい數ひとしくこそ侍らめ **とるべき方** か (同) 末

とを 十 十夜をよといへる類ひつ、たてのどとのみもいへり **とをあせさる** (竹

とり) 家のあさりひるのありさよも過て光りさりもち月のありさをとをあいせ

るさりりよ 云々 **とどづ、とを** (六帖) 四 鳥の子を十づ、十のりさぬとも 十ごよも

れぬ物なれば百といふべき **とをさこそよ** 十、二十、三十、(源 うつせみ) 五 およびを

がめてとをはさこそよそあどかぞふるさま こ、い、基の目を **とをといひつ、よつ**

(伊勢物) 十六 「手ををりて逢見一事をかぞふればとをといひつ、四つへまけり

(拾穂抄) 古注云 十四年といふ説あきども只四十年相そひさるもの、床となる、所

方よい さふべきよや次の **とをといひてひとつふさつ** (蜻蛉日記) 上下七道綱のを

けるふ日記 記の語脈同く聞ゆ **とをといひてひとつふさつ** (蜻蛉日記) さききころの歳

る所 お **かくて人よくからぬさほよとをといひてひとつふたつ** のといへあまり

よけり **とよあまほ** (源 紅葉の賀) 十 十よあまりぬる人ひ、ああそびい侍る

もの **と** (狭) 五 上 ちち今ふさつバりりやさりたまはざらん 是の大將の事也 (同) 九 十一

四つ五つあまらせ給へる 是の源氏 **十バりり** (枕) 三 廿 をのこ子の十バりりあるが

又五つ六つバりりあるが **同** 廿 宰相の君ぞ十バりり 云々是のた、物の數よ

とをり 十日 (かけろふ日記) 中 一 七月十日よもかりぬ (枕) 九 故殿の御さめよ月でと

の十日 云々忌日 九月十日 云々 **十日のそと** **十日の日** (同) 十四 三月十日のそと 云々

かいのいづくり(新古)上「此ゆふべふりくる雨の彦星比とこる舟のりのるづ

くり此新古の歌(赤人集)よのくとくこ船のとほり又(方)十九よの早榜船之(方)卅三

彦星の川瀬を渡るさを舟の得行てとてん川ついで思ふ速の意といへり。但大方次

門をわたる意をうねるやうありそれ天の川門の意なりさてほの島わく瀉をど

すべて水の上よもよせ大空と海おも比して舟のおとく通り行く意一つの詞のやうと思

ひ(好忠)上八月「打むきてとこる雁の羽風も天の川浪ささぐらんりも(夫)十二

「あいち島とわさる雁の秋風は聲をよあぐる浪のをちりと是の次のとわたるの所お

るべし(堀川)師「夜を寒とありの浦に瀉風よとこる千鳥こゑささぐかり(夫)

十七「風さゆるふは川のべれ小夜千鳥よもよとわさる聲さこゆかり(拾遺愚草)下

「天の風初雪うろくかさぎのとこる橋のあり明のそら(續古)秋上「見るま、よ

秋風さむい天の原とこる月のかけのさやけさ(玉)雜二萬里小「興津風ふけゆく

ま、よあろ瀉とわさる月の影れさやけさ以上鳥にも月にもとわさりすつる(拾

遺愚草)中「瀉びささけのりこり友千鳥とわさりすつる沖の小島よとわさりか

へる(壬生)中「住吉の松やつきさき夕時雨とわさりあへるあいち山是も時雨

ふりくる意也ふりくる意也とわさる是の門を(方)廿七「山のせれさ、らえをとこ事也月の天の原門度光り見らく

「よしも是は疾わさるの意のあしされど後々月によめる哥前(古)管根「秋風は聲を

よ出したるなどもこれよりとりてよまれしなるべし是は天の戸を専にして疾(夫)十七

不まあけてくる舟の天のとわさる雁よぞありける是は天の戸を専にして疾(夫)十七

「駒とめて諏訪のとわさる旅人の氷のそりの音れさやけさ是ら天の門諏訪の門よ

小同「ゆらのととこる舟人梶をさえ云々共は湊の意也又(方)十八「彦星とたか

もこつめとこよひあへん天の漢門よ波とつあゆめとよめる。岩門川門又湊もせとあ

べき所をい備(新後撰)俊成「明石がさ月の出いそやちぬらん須磨の波ちよちと

へるありりとこる(同)親王道二品「すまの關明りと近き月りけよ浦のとこる千鳥をく

也(續後拾)院一條「さえまさほさる河原の月影よとわさる千鳥聲をふけぬる

とが咎。罪の意にて俗と同但物語文などに罪科の意を大方(源すま)八おそやけ

のりこまりある人のうつさまよて世ありふるとがおもきこさよ人の國よ

も侍るあるを(宇治拾)十四流罪すべけれど道摩がとがあらすとて(盛衰)十二

讚岐へ流されさせ大乘經何のとがおほりて都の内に入せ給はざるべきつととが

給ひ崇徳院御詞大乗經何のとがおほりて都の内に入せ給はざるべきつととが

たうさね(盛衰)七燕丹へのがれがさつととがをのがれ

いへ(同 未摘)七 おと人のいそんやうよとがあらはされそこ、の色好み也(同 梅り

え)六 いひいらぬ匂ひどものす、とおくれさるがくさなとりいさ、りのとがを

こき給うて 是は薰物よいへ **とが** 是ハ俗のカマヒニナル、サシカマ

(源 やとり木) 四十 これいとがあるむりりの事りハ(同 タル又カマヒナキなどの意也

まつけてそぐ、まんよとがあるまどきを(同 ハ、き、)九 大方の世まつけて見るま

いとがあきも。 周易に无咎といへる **補(万)** 十四 つくまねのそがひ見ゆるあー不

山あーりるとがもさね見えなくよ(續拾) 戀三法 印憲實 「たのめても訪ぬハ人のならひよて

まづやうき身の科と成なん(同) 雜中 行經 「ながらへていけるを今ハなけくりあうきハ命

のとがあらねども(山家) 上 「花見よとむれつ、人のくるのそぞあさらさくられと

がよハありける

とりへり 十返。 松よいへり、松ハ百年よ一度常な (新拾) 賀 經顯 「ひさあへん友とや君

よちぎるらん十りへりの松れ花のさくまで(新後拾) 慶賀儀 同三司 「君が代ハ契るもひさ

一とせを十りへりふべき千々の松原

とりへる 鷹よい (袖中抄) 九 「これが身ハとりへる鷹と成まねり年をふまどもこひ

をわそれ 顯昭云鷹よへるといふ事をよむハ毛のあたるありとやへりといふハ

鳥屋よて毛のかりる也山ウへりといふハ山よて毛のかりる也云々

へるを詞を畧してとかへるといへ (拾) 「そ鷹の 云々とよみされハ山よてりへると

どもそれ いウと開ゆ古哥よ 云々 大方此とウへるといふ事ハもろくの京ハなかの鷹飼案内知たるものども

といらぬ事ハ侍りけり古ハ哥どもよて意をうるよとといふハ鳥といふ詞也云々 その鳥

鷹也云々 されバどウへるといふハたゞ惣トて鷹の毛のウへるをいふとぞ思ふべき

れハ山ウへりをもとかへる山とよめり年をふとよむも山あてもとやあても久くウへ

るよと心得 猶くハくハウの書 (後撰) 二 「忘るとハウらとざらんそ鷹のと

りへる山の椎ハもとぢぢ(拾) 戀 雜 「そ鷹のとりにへる山のまひ柴の葉ガへハまとも

君ハりへせト(兼輔) 「そ鷹のとりにへる山のまひのえれときハよりれぬ中をこの

まん(金) 冬 匡房 「そ鷹のまらふよ色やまがふらんとりへる山ハ霞ふるあり(拾遺愚

草) 上 「梓弓末の原野ハ引を悉てとりへる鷹をけふぞあハる **補(新千)** 戀五 家隆 「そ

さりのとかへる山れくその葉のーらさからけうらとつるのあ(新後拾) 冬 貞世 「そ

さりれとるへる山の木れ下よやどりとるまぞりくりつ、(狹) 三ノ 下 「ことのも

ぞあやたのまむそーさりのとりへる山ハもとぢぢぬとも

とがり 鳥狩 (万) 廿八 垣こーよ犬よびこーて鳥獵 トガリ する公 云々 (同) 廿六 「梓弓末ハ原

野ハ鷹田 トガリ する君ガゆづるのたえんと思へや(夫) 卅二 信賴 「とかりするさつをのゆづる

打さえてあさらぬ戀よやまふころりか **とつとがり** (万) 十九 始鷹獵 トガリ さませやこり

れん 畧解云鷹ハ義を以てかけるよて **補(万)** 十七 四十五 あめのふる日を等我理須等 云々

(同)十四 登我里(續古)冬光明峯寺入道 前攝政左大臣 「ぬれつ、ぞーひてとりりの梓弓末のそら野はあられふるら(万代)鳥羽院 戀五後 「忘れめや契る末野の梓弓とかりのゆづる絶のそつとも(同)」「とがせとがとかりのゆづる末つひようらみよとてや引をかれけむ」とがりや 尖矢 宇治拾 八ノ十八獵人の とがり矢を弓よつがひて(同)十九廿宗ゆきう郎とがりやをそけて

とぐぬ とりぞのひとく 解の處

とがと(三金)「たひ終る山(童)よとこさえつ、あけぬら(童)よけりとりぞか

糸の聲きこゆある(童)のなるい。(童蒙抄)山家冬夜とい。玉勝間よ

とがむ 答ひ俗(万)四十九吾をるを害目たまふ(同)廿四事も咎莫(同)卅八人も

登賀米授(神代紀)上卅不愠(後撰)春「梅の花よをかがらとんごぎもとがとがむ

さうりかかよもこそちめ(枕)十四靴負のまけの夜行 云々疑のものやあるとたの

ふれよもとがむとがむる(古)上「梅の花さちよるわりありより人のとがむる

香よぞーとける(源)卅とかりいげくとがむる里人おそく侍らんよとがめん

(惠慶)「早苗とりおのがつくらぬ秋の田をかりよきぬとや田ぬいとがめん見とがむ

聞とがむ 類ぐひ上のか とがめて とがめい ちどくさく とがめ(枕)六を霞

の間より見ゆるいととがめさせ給ふよ(源)卅心いらぬ人かを御ひとりゑこ

いととがめあへり とがめ出(同)寄生)五十誰りのとがめ出べきとがめらる(狭)卅八

例の罪さり所なく涙さへおちて人よもとがめられさせ給ひぬべきまぎらそーよ

とがめ 体の語(源)末摘)卅鼻のとがめを猶あるやうあらんと 云々(同)夕霧)卅此御と

がめぞかんいりよまきこーめーるより(源)をとめ)四十左衛門督その人ならぬを奉

りてとがめありけれど物とがめ 出の部よ 補(万)十二「人のとてこと、がめせぬ

いめよこれ 云々(同)十三(頼政)「戀する女何をと人やとがむらん山をと、ぎは

今朝のまつ身を(拾玉)「ともしればかまほけいさを見とがめてこと、ふ人のか

さけたまか(月清)「ぬー、らぬ岡への里を來てとへべこさへぬさきよ犬ぞと

がむる(宇治拾)十九國司とがめていりよ大宮司ならんらよ(著聞)十六いりあか、

は事をいするぞととがめけむ

とかく 俗よもいへる彼是又イロノの意也又アチコチなども譯すべ(源)帚木)四こ

とぞくをよてとかくまぎらいつ、(同)十とりくひきつくるひてのさどり見さら

ん 云々(同)七さうとーくしてとりくまぎれありき侍りーを アチコ(同)夕霧)十と

かくたせけられて二條の院へり給ひける 介抱セラレテなり(同)椎う木)七け

今をこゝとやれかくやれといひつゝ、此車をやらせつゝ、とふゝかくふゝイロクニ 寐臥ス意也

〔拾〕戀三「ちめゆえぬ野への秋萩風ふけばとふゝかくふゝ物をこそおもへ」と見かう見

見る俗の右チ見テモ左チ（伊勢物）段一門より出てと見かう見見けれどとそれバリ、リ

ドウスレバ云々の意（古）「そへよとてとすればか、りかくをきバあはいひーら

泣あふささるさよとありか、り 約也たゞトウカウの意也（枕）九 宮よとめて参

りたる頃 云々 繪かどとり出て見せさせ給ふごも手もえさし出まどうりかゝこれ

いとありかれり、りかどの給へるよ〇此以下のありはるあどの俗よいふ事ノ

とありともか、りとも是も同意なれどドウギヤトモカウヂ（落く不）一とありと

もか、りともよき事ありあんやとあれバか、り 前のとすれハ（源 帚木）九とあれ

バか、りあふささるさよてあのみよさてありぬべき人のそくさきをとあらんか、

らんかくあらん。ウアラウ也（同）三とあらん折よもか、らんきざきをも見をぐゝ

さらん中こそちざりふりくあをれからめとあらバか、らバ かくあらバ也。アラ

（同 總角）四とあらバか、らバかど行末のあらまゝとよとりまてとあるもか、

るもかくあ。アレモコレモよてとへバ（同 タウヤ）九とあるもか、るもおかト命の

限りある物よあんあるとの給へバ（同 關や）六とあるもか、るも世のこととりかれ

バとあることか、ること以下同例也（源 若菜）下六とある事か、る事よ打さびき

（同 柏木）四とある事もか、る事も云々とあることか、るをり（同 朝顔）廿とある

ことか、る折よつけて何事もきこえかよひよとある筋か、る方（同 若菜）下八

女御更衣といへどとあるをぢか、るりよよつけてかゝるる人もありとあるさま

か、るおもむき是もイロクニ（同 上九）人の心のとあるさまか、るおもむ

きを見るよ

〇とよかくよ（万）卅四浪の共さびく玉もの云云トニカクニ、ろいもさぎナヒク玉藻ノヤウ

アダナル心ハ（同）四五「云云人いふとも云々此（新拾）四二」とよかくよ人いへ

ども云々と改て入れらるたり共は同（盛衰）十四ノ末眞海ガカ いざハ眞海も寺法

師あり云々打とけがさしとて不興かりけきバ眞海とよかくよ面目かくて歸りよけ

りアチラヘモコ（源 帚木）七とよかくよつけて物まめやりようろカレニツケテコ

（補 後拾）戀三「霜りれのかやり下をれとにかくにおもひみだれて過すころかか

とよもかくよ（万）六卅「何いより使のきつる君をこそ左右まちがてよそれりあ

りて来ぬよの使を何よりせん（後撰）「世の中うき物をれや人てとのとよも

トカクニ君をこそまてとあり（賀）「古」賀かくいつゝ、とにもかくにもながらへ

て君が八千代よあふよーものか(新千) 雜上土 御門院 一時雨ふるこのてかーその二おもて

とにもかくにもぬる、袖かなとやかくや(源 あふひ) 四十とやうくやとおぞーあつ

りひきこえさせ給へるさま 云々。此やハ蝶や花やのヤよてよ。近く俗のカレヤコレヤの意也。とやかうや(同 藤裏

葉) 四 ちりあき事かれと耳とまりてとやううやと思ひありー給ふ 是ハとやせんか

前のとやうくや共 よサマハの意也

○とてやうくてや ドウシテヨカラウヤカ (同 東や) 五十とてやうくてやとよろづよ

よからんあらまーをと思ひつゞくるよ とてもかくても ドウシテモカ。又所詮の

き代よとてもとばう (新古) 雜上 山のもよ思ひもいらト世中ハとてもかくても有明

の月(拾玉) 四 「よーあーを思ひーる人ぞあまがととてもかくても世ありがと

き(源 帚木) 四十とてもかくても今ハいふりひあきまぐせかりけきバ(同 若紫) 四十

いりまかりて給ふべき御ありさまよりとてもかくてもたのもーき人々よおくれ

給へるがいとよきと思ふよ涙のとまらぬを イツレニ (江談抄) 三かどりく思ひり

けぬ所ハいそまひるぞ都るてまきよりーとをりまめくら詠哥ーて曰「世の

中ハとてもかくてもまぐーてん宮もどらやもてーかけきバ 此(新古) 雜下蟬丸、三

事と 右のうくてもと零しるハて同意也。但是ハ所詮の意の (盛衰) 卅八二段

事と 右のうくてもと零しるハて同意也。但是ハ所詮の意の (盛衰) 卅八二段

よよもたまけ参らせせやと存侍れども源氏くがまちくたりとてものぐれ給ふ

べき御身から 同書 (新拾) 哀傷 「とてもかくかりの世からさかりよさよとあ

き人のかへらさるらん 宣長云是ハいやーき詞ハて古く

○ともかくも 前のとても同何トモ (枕) 二ノ廿 ひさーうたちて侍りつれどもか

くも侍らざりつれば かへりおどの何 (古) 別 「から衣 云々 左注 云々 ともかうもいそ

でよとてつうハーける(源 空蟬) 八 あさほく覺えてともかくも思ひこられせやを

らおき出て(同 わう紫) 廿 ともかうも只今ハ聞えん方かーも御心さーあらバ今四

五年をまぐーてこそハともかうもとの給へバ(同 桐壺) 七 更衣の頼ひてい かくさ

らともかくもからんを御覽トてんとおぞーめまよ 生死ノドウトモカウト (神代

紀) 下ノ 取捨隨勅 取と捨 (宇治拾) 十一ノ十六 人を いまたともりくもーな さでお

きたりけるよ(万) 三ノ 四 カモ 左右將爲(同) 六ノ 卅三 おほならバ 左毛 カモ 右毛 カモ せむを ともかくも

して(宇治拾) 七ノ 十五 これともかくもーて引うくせ ともあれかくもあれ 俗ハ何ハト

るよ(源 ちのし) 十 ともあれくもあれ夜のあけてぬさきよ御舟よ奉れとて とま

れかくまれ 右ハ いへるなり (土佐日記) 終 とまれかうまれとくやりてん 補 (和

泉式部物) 「あふことハとまれかくまれなけりーをうらみたえせぬ中となりせば

とさまかうさまよ 是も前又出しさるおとくさくさくのと同意也カレコレアチコチド
すべし 譯 (雄略紀) 七 闇夜東西求覓 アチコチトサの意也 (源 手習) 十 されど観音とさまか

うさまよとく、と給ひけきば此僧都まけ奉りぬ (同 蜻蛉) 九 とさまかうさまよ思
ふよむ終のせきのずるこ、ちいていりよもくをべき方もおぞえ給ひぬを (宇治

拾) 二 三 かやうよあまよ、びとさまかうさまよるる露をりりもささぎさるけい
きもか (同 須磨) 七 とさまかうさまよ思給へよらん方かくかん ドウトモカ (榮 楚王

の夢) 廿 今ひとさまかうさまよおぞてこそかぐさめさせ給ひぬ カレコレトマ (源 漂海)
九 今志を一世の中を思ひのとむるやどいとさまりうさまよ物をおぞい、るまで見

奉らんとこそ思給へつれ (同 卅) 七 とさまかうさまよ思給へのこそ事をさ 是等ドウ
(同 常夏) 十 かのめよ思ひをぐさん事のとさまかうさまよはまかさきぞよつりむむづり

いき御かさらひかりける イヅレニシ
補 とかけ 山のたじミ (万) 廿三 もの、ふのいせせのもりけすと、ぎを今もかのぬ
り山のとりけあ たる陰也

とりけ (和名) 十五 蛭堰一名蜥蜴 云々 本草云一名守官 和名 (宇治拾) 廿八 あぶそちむ
りぞとりけくちあそちと、出て目鼻ともいせけひと身よとりつきてさせども 云々

とりき 斗概 今と (和名) 十四 禮記注云概平斗斛者也斗概 俗云度
とよ豊 同 此詞次又出せるおとくさくさく (玉篇) 大也 (廣韻) 多也 (易) 豊卦、疏豊者

多大之名盈足之義財多徳大故謂之豊 とよ 以下すべて 次の とよあ原又 (万) 十四
の豊泊瀬道 トヨハツセ といへるなど 是等の意也

補 とよ ておをい也 (新古) 戀五 俊成女「ゆめりとよとよ」面影もちきりしもおすれぞをがら
うつ、ならねば (大鏡) かこきものとの侍りしとよ (職人盡) た、うかみうを

御と、うりせめせ色もよくいできて候ぞとよ 此詞いうよりとよとよと源氏よもおや
とよとよとよ 豊旗雲 (八雲) 三 大なる旗よ似て赤きゆふべの雲也 とみゆ。案せるお

のやうよとよ なび (万) 十二 わとつ海の豊旗雲よいりひさしこよひの月夜あきらけく
けるをよめる也 入日

こそ (新葉) 春下 關白 「八日さそ山のたぐねの櫻花とよとよ雲れいろよめつ、
(同) 頼澄 「わこの原入目も見えぬくれそて、とよとよ雲よか、る白浪 猶此ころの

れ多くみえさり。 (文選) など雲よ よそへて旗を雲旗ともいへり (文徳實録) 十八 天安二年六月庚子早且有白雲自良
巨坤時人謂之旗雲 是の非常の事おて (新拾) 戀三 待人のこよひもいさや入日さ

はとよとよ雲のゆふくれの空

とより (源 梅枝) 十二 書の事をたへよおろしき事へとよりてこそかき出る人あり

けれど 案するは前出、とをよるは同く是もやのらうなる筆づらひをいへるはや

とよをらびめ 豊岡姫 (拾) (神樂哥) 「みてぐらわわりよのあらはあめまはたとよを

らひめれとやのみてぐら (愚案抄) 大ひるめの尊を申す天照大神の御名也へり

真淵 豊宇氣ひめの命也 へり (源をとめ) 八 「あめまはたとよをら姫の官人もご心

ざはちめを忘るを (實方集) 人のもとよかみを 「何をしてとよをら姫をいのらま

ゆふしてりさき神無月りあ

とよられよ (後拾) かい。人の長門へ今かん下る 「ちらかみのたちながらたは長門

かるとよられ里のとよられより 此詞管見はの儘もいられずも「いとく立よられ

詳よ注せず音づれよの意おも 思へる小やさるおても穩からず

とよむ ひききと、人の打さむく意人の聲のサワガシキをも、又かく聲又鳥の音、又の

とよむ磯のとよむなど山 波瀧ちどすべて水の音もいへり郭公や鹿おひひおれたり山の

帖 四 「我戀の人の知り糸とやとよめとやとよむらんとやちれバくきとや 人のいひさ

同 三 「岩瀧磯さへとよむうふ川のありさうさひて吾思をかくよ (古) 二 「秋かれ

巴山とよむまでかく鹿はわれおとらめやひとりぬる夜 いとよ (古) 上 「秋萩さう

らびれをきバ足引の山下とよみ鹿のかくらん (後撰) 雜四山 田法師 「足引の山下とよをか

く鳥もごごとさえ物思ふらめや (源 あう一) 五 身をらくて此御身ひとつをそく

ひ奉らんととよみて佛神と糸んと奉る (万) 十ノ 「神おひれ山下動ゆく水は蛙かく

なり秋といえんとや (同) 八、四 「あー引の山下響かく鹿の 云々 (同) 二ノ 四 邊見者白

浪散動 (同) 六、七 海人船散動とよめる (同) 六、七 動流の約なり (古) 物名 「くべきや

ど時過ぬれや待びてかくなる聲の人をとよむる とよむる 同 (万) 十五 「こ

ひをかバこひもいねとや郭公物もふ時 まきあき等余牟流とよまは 令響 (万) 八、五 「卯

花もいまささるねバ郭公さほの山 べと來鳴令響 (同) 八、四 「此ころのあさけあきけ

バあー引の山を令響小男鹿かくも とよめ 此とよめいとよませの約也 (万) 十五 山妣古等余米さ

を鹿かくも

あきとよむ 鳴も泣も (万) 廿七 「夏山の梢は繁しと、ぎは 鳴響ある聲のそるけさ

(源 あし) 六 六 あきとよむ聲いりづちよもおとらは (同 若菜) 上 廿五 ち、らの男女か

いもゆきりてあきとよむ 六帖 四 「ときいかる花橘しと、ぎをなきとよめつ、

千代もへぬり 此とよめいとよませの約也

とようちびと 豊氏人よて祭りあどするおや (夫) 廿九 「神風やまつのかくは秋の

いろよとようち人の袖さへぞてる

とよのと一 豊の年 (詩) 周頌 豊年多黍多稌 (春秋) 桓三 大有年 公羊 大有年 何大豊年也 注 謂五穀皆大成熟 (万) 十七 新年のまじめ 豊乃登之 志あるとからし雪のふれる (夫) 十八 俊成 一世をいのる神の志る 一のとよのと一ふりくつめれるとゆきまぞいる年ある 年ゆさう 別は出せ

とよのありり 豊明。 明の字の義次のとよ。 高貴の人の大宴樂し給ふをいふ但後々の大嘗會をどみて大方の心思ひうげ五節の舞姫の事 (六百番哥合) 元日宴 「ひ月と

日とかける所謂本朝月令云延暦八年正月一日 云々 今日正月朔豊明聞召云これのとならま白馬踏哥重陽新嘗これらの節會ごと皆とよのありりとかけりさればとよのありりと節會を申せ也 以上陳 (年中行事哥合) 三十一番右 「よひかめやきのふれそつををさめおきけふとささまふ雲の上人 注 およそとよのありりと惣て節會の名也けふは限るべからせその子細は六百番の加茂の哥合よりさねと沙汰ありし事也 (公事根原) 十一月中辰日これ年の稻を神奉らせ給ひて今日君も聞召臣下も給ふ故に節會行へる 以上 (延喜式) 四。 造酒司 豊樂日 (万) 十九、四十二

豊宴見せまをけふは 是は早春の (神武紀) 一作 大室於忍阪邑盛設宴饗 (景行紀) 廿一 招群卿而宴數日矣 云々 其宴樂之日群卿百寮必情在戲遊不存國家 (うつろ 藤原

の君) 廿三 三あぬり七夜とよのありりして打あけあそぶ 上野のみこ人の娘をうさひて (源幻) 廿一 官人へとよのありりいそぐけふ日かけもあらせくらいつるりか (新古) 賀 輔親

「あり終さば朝日の里れひくけ草とよのありりのかさゝかるべ (夫) 十八 信實 「もろ人のむれても庭にたつの日へとよのありりぞいやめづらざる (同) 同 「雲のうへやと

よのありりの月れいろは日りげをそふるをこのをとめて (續古) 神祇 家衡 「神葉のちえざれむらのゆふいで、とよのありりのたむけまどとる (續千) 賀 「かが君のちとせ

のかけをか、と山とよのありりまゐるがたのしさ (中臣壽詞) 豊明仁明御坐止 此詞のもとの酒のみ 赤丹乃穂爾聞食テ大御面ノ殊ニ麗シク照明ラビ御榮エ坐ヲ白

セリ (散木) 鷹狩 「ひりけさまとよのありりれまかりまとかさ野のをのまけふもくらいつ (新千) 冬 爲定 「そのま、は霜ふりて、一のぶりを豊れあかりの山あるの袖

とよのあそび 右ふ (神樂哥) 「笹のまよ雪ふりつもる冬の夜よとよのあそびをさる

がたのしさ (真淵) 云おやけよてよもすがら灯火をとりて大神遊し給ふをいへり云々 明りの大御酒のまよる詞也云々とよのほろびといふもとよのほかりして神遊ひする也云々。又宣長云真淵の夜宴の火の光の事といはれたるいいたくたがへり夜宴をとよのほろびといふも大御酒をめて大御顔のてりほろびますよりいふ名

あるをや
といへり

とよのゆき豊の雪。豊年の雪。（夫）十八「龜山や大内山を」とさせばふさをよみて

りとの雪よも

とよのこそぎ豊の御祓（拾）の抄十月は此事あり豊のこそぎといふ世俗は河原の

御さらへといふ（拾）戀一、大嘗會の御禊は物見侍「わまさ見」とよのこそぎのもろ

人の君も物を思へるるを（補）（後拾）勢大輔「世よとよむとよのこそぎをよそあ

いてをいすの山此とゆきをや見是も大嘗會の也

とよのこやびと豊の宮人（後拾）雜五、中納言實成宰相「おろり」とよのこや人

さ一分てしるきひりけをあそれとぞこ五節奉りけるお云々

とよあきつ豊秋津島（八雲）三、上國云々

とよあし豊蘆原（神代紀）上廿豊葦原中國（玉）神祇「神代よりみくさのたうら

つたひりてとよあしむらのある」とぞある

とよさりのゆる豊榮登（金）賀前齋宮いせおれ「くもりかくとよさり

のゆる朝日よの君ぞつりへん万代まで（延喜式）六月朝日豊榮登稱皇御孫命能宇

豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣

とよとてくら豊幣（後拾）雜六、神祇長能「白妙のとよとてくらをとりもちていそひぞ、む

る紫の野（補）（万代）夏法印「神まつるとよとてくらのゆふいでを枝まかけてもさ

けるうのちか豊御酒。大御酒といへるは同く酒と（万）六、廿かへりこん日相のまん酒

とよとてくら豊御酒。大御酒といへるは同く酒と（万）六、廿かへりこん日相のまん酒

ぞ此豊御酒（同）廿八「焼刀のかどうち放つまをらのつぐ豊御酒は吾酔よけり

とたち鳥立の意なれど体の詞にて狩場池草むらさき諸鳥の集るやうなまねきてさ

と、へ草をやして鳥のむんやうなまうけれくありよりて雪みて其所とも（千）冬

れぬなどよめる也又櫻よよめるの狩といふよつきてよろへいへるあるべし（千）冬

（堀川）「やうた尾のましろの鷹をひきまをて宇多のとさちをかりくらいつるとたち

の芝を（堀）（新古）冬「とくり野のかつふる雪ようづもれてとさちも見え草がくれ

つ、（夫）五、戀の心を「かりそめよ見て」とさちを立忍ひかさ野のきよそのいさう

つかり（同）十八「あそれるかりバのをの、とさち哉思へバこれやつとのかよひ

ち（拾遺員外）「さゞはかくかこの、原は雪ちりてとさちもいらせある、けふりか

（夫）十六「まかりの、とさちをうづむから柴は猶ふりまさる山のこがら（續後

拾）冬後鳥（夫）「まかりゆる狩場のをの、風さえてとさちの芝は霞ふるあり（夫）十八

「あつづの、とさちのそ、さふと一たき朝霜さけていづる狩人（新後撰）冬土御院（門院）「あ

らあ **とち** **とちて** (同) 九 有家 「夏きてぞ野中の庵のあれまさる窓とちてけり軒のあさ

くさ (源 百々し) 三 内子参り給ふ上達部かともそべて道とちてまつりごともたえて

かん侍るくて往來もなき也 **とちつる** (夫) 十六 後久我 「たえとりの木のそぐ下の

おとづきも霜よとちつる虫のこゑと **とぢらる** (同) 卅 山家旅 「旅寐をるやどのと

山よとぢられてささきのりづらくるひとあ **源** (と、さ、) 八 さびしうあわれ

たらん葎の門よ思ひの外まらうさけあらん人のとぢられらんこそ限りなくめづ

らしくの覺えめ **とちまつる** (夫) 卅五 陵園 「とちまつるま山のおくれ松の戸をうら

やましくも出る月哉 **補** (万代) 興 山里の春の霞よとぢられて栖りまどへる鶯の聲

○ **とちこもる** 閉籠めて (源 橋姫) 十 三 わざととちこもりてからひよと大方そり **とち**

くもあらぬ身よしも世中をそむき顔あらんも (同 總角) 九十 ころ、りこよもおぞつ

りかくてとちこもり給へる事をきこえ給へ **盛衰** 廿三 十 片山里よとちこもり **とち**

○ **口をとちて** **盛衰** 廿三 云々 評定あるべしとの給ふ當座の公卿や、久しく口をとち

てありける **源** 未摘 廿六 何事もいそれ給ひせこれさへ口とちさるこ、ち給へ **とち**

とづ 綴。糸よて衣ととちつけ又 (字鏡) 紵 鹿縫也。氷よいへるも水の凝りて一つおな

前の明きさるを閉フサグも語の **とづる** **とち** **とちさる** などのさぐひ。櫻の皮よて

もとの同意あれバ動かしいふ詞 **とづる** **とち** **とちさる** 前のと同例也。櫃などどづ

るを **とちめ** の所み。どちめとちの **とち** **とちさる** (枕) 四 さまめり **とち** 物、うを

ふべし **とちめ** の所み。順お前お出 **とち** **とちさる** (新六帖) 五 信實 「とちおけ

やうのさういむらこの糸よてをりく **とちさる** **とちおく** (新六帖) 五 信實 「とちおけ

る枕さうい **とちさる** の夢い見えけ **とち** (壬生) 上 衣川けさ立わ

さる春風よとち **とち** 氷もとけや **とち** ぬらん **とちつる** (夫) 卅一 和 氷を水といふ水の

とちつれば冬いづくも音 **とち** の里 **とち** りさぬ (狭) 卅一 上 よるのやとあいと **とち**

りさねてける氷のくさび **とちつく** **とちつくる** ともい **とちつけ** (後拾) 一 戀 賀茂祭

の **とち** 青色のひものおちて侍りけるを女の車よりから衣のひもときてとちつけ

侍りけるを **とち** (夫) 四 行 「風ふくと枝をそかれてあるま **とち** 花とちつけよ青柳の

いと (源 紅葉の賀) 廿九 袖の事を **とち** づとちつけさせ給へとてお **とち** せておこせ

るを **補** (隆信集) 「ふるさとの池の氷よとぢられて心よ月をやと **とち** つるかか

とつぐ 嫁 (延喜式) 鎮火祭 神伊佐奈伎伊佐奈美 乃 命妹妹二柱嫁繼給 (盛衰) 七 四段 上

き夫よあいせんとしけるをあきんどよとつぎて親よ勘當せられて (うつろ 藏開) 二 上

その娘とつぎ時よかり給ひ **とち** づ (うつろ 藏開) 上 九 かの人とつぎからひたらん

よ **とち** づよよけあふ見えざら (著聞) 九 わさあへまて番り妹よとつぎけり

○ **とつぎ** を **とち** へとり (和名) 十八 脚 鶴 字 或作 和名 爾波久奈布里 日本紀 神代紀 上 七 鶴 鶴

とづく今いふ（重之集）一「それ原やふせやまとづくかけもたれゆゑよかひわ
れいこさし、とづらん（盛衰）川十五宇治の所は馬の足のとづらんをどいたつををくうて
あゆませよ馬の足もつまもとづあをくれておよがせよ（持統紀）十憂不能達六任
博麻計ガト得通トツク天朝

とつくよ外つ國（景行紀）廿隨其情願令班邦トツク畿之外ニ（著聞）五一玄「とつくよの水
草きよしことしけき都のうちいをまぬまされり

とつき十繼。十代（古）序かの御時より此り年をも、とせあまり世も十つきよか
んなりよける

補とつみやところ（殷富門院大輔集）「もろ人をわさはちりひのさえせぬいささら
川のとつみやところ

と孫 刀禰（宣長云）刀禰と王臣百官をそべていふ。今案するは賤しき者よても公事
るもろの例也又（契沖）が説のおどく、（貞觀儀式）大祓儀云々 百官會集祓處式兵
すこしよきさまふいへるもほるべし

二省丞録引文武刀禰西面列立北面云々（延喜式）太政官廿凡諸節會五位見參者未召刀
禰之前式部省書其簿進太政官（同）式部式下省率四位已下刀禰等列立門外

（同）八 龍田風神祭二百官能 人等倭國六縣能 刀禰男女爾 至万氏 里のとね（後拾）神世

の中さどがしく侍りける時さとのとね宣旨よてまつりつらうまつるべきを哥ふと
つなんいるべきといひければ云々 長能あまのとね（神樂哥）「いせトはや（古本）あま

のとね同らがたくすのけ云々 山のとね（兼盛）「旅人のそりもささごもむなしきを
むやくいまね山のとねたち（契沖云）山のとねどの盗人をさしていふ（神樂哥）い蟹を

今案するは兼りりの繪お盗人うきたるをよめる也され山賊の長なるを山のをさ補
どもと戯れてよきさまふいへる也俚言よオカシラオヤカタなどいへる意なるべし
廣足云とねのくさき事（記傳）三十三ノ五十四丁見えさり。とねはらそひといふ
事紫式部日記ありこい男どち力くらべする事おて今俗おするうでれしなどの類也

とねり 舍人。近く召つゝいなる、小臣の名也又牛飼又（つれく）たゞ人も舍人をと給
ゆるきそのゆ、しくそのゆ（注） 近衛舍人の即隨身也隨身の下臈也隨身は兩様あり本

府の隨身と小隨身と也小隨身のいづれの家よても御免よ及いづつれらる、也本府
の隨身は天子の御免かくていづれざる也（花鳥余情）中 少將の召具する童を小舍人

といふ也（職原抄）上ノ中務省云々 内舍人九十人可然之侍任之（注）攝政關白給内舍人
隨身時殊撰其器召仕之（注）帶劔之官也（注）從六位上也常守護禁中也御幸時前後供奉

云々 近代者殿上童之成官也云々 不元服而附殿上札者皆内舍人也或公卿之子任之
奉公始也依其器量至納言也（万）十三宮の舍人も（神樂哥）「此笹いづこのさ、

ぞとねりらがこしよさされるとも岡の笹（拾）物名、そ「いよへいおされりくど

わびぬまばとねりがきぬも今のきつべ(源 松風)廿三近衛づらさの名たりきとねり

云々(盛衰)六段 既の隅へ合子をがら投せてとり木曾が舍人これを見て(同)四十大

臣殿とねりの段(是)牛(枕)十六牛(枕)云々(抄)牛の雑色隨身(云々)小舎人(云々)

(同)十五小舎人(とら)へり(補)拾遺(雑下)健守法師「山おしも野おしもかくてこ、ろ

とつ今いとねり此糸やぞこひしき(うつ)布(國)ゆつり(下)とねりの糸やの布ふいのや

うみてのよけ給ふよとてひきもてきて(補)とねりこ(万代)位顯氏「とねりこが袖もつゆけいとををり此しけきさ、ふ此

行さきるさ(と)かり(隣) (万)廿一 刀奈里のきぬをりてきあ(源 夕顔)六とかりの事ハえ聞侍

ら(古) (古) (古) 「出てゆるん人をとぐめんよしあきよとかりのりよまをかもひぬり

な(同) 隣よりとこおつの花をこひよおこせたりけれ(山家)下「わづらひて月よ

いよるもりよひけりとかりへつふあせの布を道(月清)「ちめてけり朝けの烟たち

そめてとかりとされる杉の菴哉(と)かりと(ち)りきと(蜻蛉日記)上「ちり記とあ

りよ心をへしける人いへるよあせせてかくいへり(哥)云(ち)り隣(ち)の部(隣)のさと

(古事記)中(聞)於隣里(と)かりある(伊勢集)六(六帖)「梅花(六)うゑてわれの

み見んとりの隣あるきも人やそるとと(と)かりのく(伊勢物)七(む)り男伊勢の

國かりける女まどえあ(と)かりの國へいくと(隣)をかふる(孟母) (古事) (永)久(忠)「たら

ち糸の更よとかりをりへけるも子を思ふ故ときくぞ悲しき(夫) (正)公(朝)「あまよ、

び隣をかへて教へける人の親こそりこりりけれ(春)の隣(は)の部(秋)の隣(あ)の部(出)

(補) (山家)上「とかりぬえこのかりやよありまよのちりあそれるものよぞあり

ける(著聞)十六「とかりさり(と)かり(神代紀)四(理)當(先)唱(万)十四(刀)奈布(と)かり(夫) (内)六(衣)笠(も

ちあがら哥をとあふる盃のきよく濁らぬ御代の久しさとあへ(と)かり(古語拾遺)

五(相)與(稱)曰(阿)波(禮)とあへつる(夫) (慈)鎮「とあへつる佛の御名の朝日よてやがてきえ

ゆくひと、せの露とあふるで(唱)る如(て)されも(同)「こ、心あきぞと(枕)十一

いりよりく心あきぞといへばとあふるでともさいそれり(と)かり(鳥)網(と)りの(所)

(と)かり(門)浪(此)と(湊)の(と)こ(る) (注) (万)十九「あま島よこぎわらんとおも

へどもありの門浪いまさささけり(久安百首) (旅)清「そりまがさありのとなみ

さこぐめり志そないでそりこの島人

とら 虎(六帖) 四 人の心をいゝたのまん十首「ひとつ毛よとらのまたらひこまつとも(土御門院御集)」「人心手グひのとらよあらねどもおれいともおどうとくあるらん」とらふそのべ(拾) 戀「ありとてもいく代りいふるから國は虎ふそのべよ身をばあけてん」とらけ(神樂哥)「あーおちの 云々 あーけ 古本 ナシ おちのとらけの駒抄あーいまぶらふれバ(補)拾玉」「此世うーとらふは野べいまさーらはいさやまばらの谷れ栖へ(宇治拾) 十五 虎よ羽をつけて野よそをつもの也(源 須磨) 物をおぢいさるさまとらおぢりもあきぬべー(拾愚) 上 「さう山のまねふまからぬとらの子ののぞらん道の末ぞもるけき

とらとる 次 約あるべし古く といまだ見及ばせ 与らぬる、 与らぬれ、 与らぬれ(平治) 下 生かから

囚る、事無 力次第あり 云々 (同) 八 かくれ所をくいて囚れ給ふよ 与らぬればと

とらへびと 共又俗ノメ (盛衰) 四十三 われらとらぬれ人よかりなば一定誅せらるべ

一(和名) 二ノ囚 倍比止 繫禁罪人也 云々 与らぬれ人ハトヲハレタル人ニツキテイ

とらへどころ 前 とり所 小同大方の 源 夕霧 四十 かの一夜ばりの御文をとらへ

所よかこちて 今俗の何々をシヨウコヨ 今俗の捕の字の意よのみ思へど古くの手よて手をと

とらへ 今俗の捕の字の意よのみ思へど古くの手よて手をと 与らぬる所てらー。 与らぬる

とらへつ 与らぬる 与らへ給ふ 与らへて 与らへらる 与らへさせ 与らへさせ

とらへて(伊勢物) 段 百一 あるトのさらりらあるあるトを給ふと聞てとらへてよませ

ける 是も次の同意よ 与らへ給ふ(源 花の宴) 五 いろいろとて手をとらへ給へれば

ふ 敬語 与らへつ ともい(同 夕顔) 二 いろいろとて手をとらへ給へれば

(同) 九 手をとらへて(枕) 二 三つをりある兒の 云々 いとちひささちりかどのあり

けるを目ざと見つけていとをりいけるおよびよとらへて 与らへさせて(同) 九

た 手のかぎり笠をとらへさせて 繪のさま也手ばかりかきてる ○此以下 捕の字の

意也 捕 与らぬる 与らへつ(神功紀) 三 一 あふみのせさのささりよかづく鳥たが

みまぎてうちよ等 邏倍菟 与らへて(大和物) 二 螢のとびありきけるをかれとらへて

と此とらひよの給いせければかざとの袖よ螢をとらへてつ、とて 云々(竹とり) 六

いて龍ととらへとらまーりバ 意也 与らへられて(源 てあらひ) 六 池よおよぐい

を山よなく鹿ととらへ人よとらへられていさんととるを見つ、 与らへさせ(竹とり)

月の都の人まうでこばとらへさせんと申せ(枕) 六ノ。 方弘が事を さし油とる灯臺

のうちしきを(抄) 灯臺の下みまぐ 物也 則ゆさん也 云々 油 單 かねつよ

うとらへられよけりさあゆめてかへればやがて灯臺のたふれぬーさうづらうち

比うけとめて入江のさそよ秋風ぞふく(拾遺)雜春「浦人の霞をあみよむをへばや浪の花をもとめて引らん

とむ(八雲)四とむ(尋)尋る也(方)十九「よくさちよ終覺て居れ河瀬尋心も志のあ

鳴千鳥りも(同)廿六「射る鹿を認河邊の(同)廿七求(と)めて(古)春上「誰

いかもとめて折つる春霞立隠をらん山の櫻を(同)賀(き)のこ「龜のをの山の岩根を

とめて落る瀧の白玉千代の數りも(拾)春恒(六帖)六「うとめてををらざらん

梅の花あやな霞さちなりくしを(源)さうき)五「をとめこがあとりと思へば神葉

のりをなつりしとめてこそをれ(拾)戀三源「とよ野の雪よこまれる山人も古

道とめてねをやなくらん跡をとむる(六帖)四(新古)賀伊勢「そみのゆのたまのまさ

をふむつる(新古)たづ「久しき跡をとむるなりけを跡とめて(猶)あ(の)部(と)めゆく(源

紅梅)十「花のりを匂は宿よとめゆりば花よめつとや人のとがめん(と)め來(と)めく

れ(と)めきつ(古)春下深「花ちれる水のまよくとめくれれば山よ春もなくな

りよけり(拾)神樂「神葉のりをりぐりしとめくれればやそうち人をまとるせりける

とめこり(と)め來(ヨウ)「(新古)春西行「とめこりし梅さりりなるわが宿せうときも

入のをりよこそよれ(貫之)廿一「とめきつ、かりほもある哉わが宿の萩のちりよ

もいられざりけを血をとめて(宇治)八。狸を射夜あけて血をとめて行て見けれ

バ云々、ノリのおと。尋(蹤)血(と)り(の)所(て)ら(補)とむ(續拾)戀一、土(御門院)「ひまとめて

いうでちらせん王簾けふよりり、る心ありとも(貫之)「山川をとめ來てこれ(落

つもる紅葉れためのおとろなりけ(同)「かくしりれ聲をとめつ、秋さぎのさけ

るをのへまわれの來よけ(新後撰)廿「神山のふもとをとむるまらりの岩うつ

浪や萬代のり(朝忠)「わがやどの梅りえよなく鶯の風のたよりよりををとめこ

一(清正)「神葉の香をとめくれれば千早振神のいぎきよさしてきよけり(著聞)七も

との文字の上をとめてあざやうよなさんは云々文字の上をとめてけり(寛平歌合)

「さぐやどの雪ふる野べ道もかゝいづこもとり人のとめけむ

どんよく(貪欲)うつろ(祭の使)四當時のそりせあられ淺くどんよく深くして

どんぢんち(貪嗔癡)撰集抄)一とんぢんちのむら雲おそひ(四解脱經)以三塗對三

毒一火塗瞋忿二刀塗慳貪三血塗愚痴

どんこん(鈍根)發心集)七鈍根無智ありとも卑下をべりら世よ師多けきバ千歳仕

ふる煩もあるま(善導)般舟讚)一根性利者皆蒙益鈍根無智難開悟

どんとま(屯食)源桐壺)廿九どんとまろくのうらひつともかど所せき迄春宮の御元服

増補雑書集覽 卷之九

の折も數まさされり(孟津)屯食つ、と飯ともいふ下膳は給ふ強飯鳥の子也とトキ

(うつろ 藏開) 廿一と一き十ぐのり(和名)餛飩四聲字苑云餅剉内麵裹煮之

とく 疾の音便とくの所よ 附

とく 頭。外のをかきといふ藏人頭は限りてとうとい(源 東や)二十ここのとうの

疑ひなく云々(枕)十一とうつき給ぬると殿上の臺盤も人もつり(古)云々(哀傷藏

人の頭にて云々(枕)八頭の弁頭の中將藏人頭にて弁官を兼る也

とく 頭。是の哥合菊合せかどい(八雲)二内裏哥合 兼日定左右頭事云々 天徳以更

衣爲頭亭子院哥合以女六七宮爲左右頭(後拾)下上東門院菊合せさせ給ひけるよ

左のとうつりまつるとてよめる 伊勢哥云々(榮月の宴)卅五左のとうよの繪所の別當

藏人の少將濟時云々 右のとうよのつくも所の別當右近少將爲光云々是も前裁(八

雲)二兩貫首といへる

とく 筒。雙六の(新猿樂記)筒父擢傍(催馬樂)大持むりめのとうさいりくのと

う(源 常夏)廿近江君の所は御りへいやくととうをひねりつ、(枕)十七あさましき物

てうもみよとられたる 重目をうたれて人よ 筒をとられてある也

とくと 音也今と同(宇治拾)八、ひりの坊のららよとととおちぬ

とろう 燈籠 (和名)十二燈爐 見涅燈籠 元式燈樓 寮式 今案三字皆通稱也(源 薄雲)卅四

とろう 遠くけて(同 帝木)卅六とろうけそへ火ありくか、けかどして(同 若紫)十一

月もあき頃かれバやり水よかゞり火ともいとうろ参りさり

とろりん 等倫。人ナ(盛衰)廿四段弓矢をとつての等倫は劣るべから(同)廿九その

体等倫は異ありよのつね

とろりう 逗留。猶豫の(大鏡)かこまりて逗留し給ふを

とろるい 同類(宇治拾)三 同類どもまか、事こそあれ

とろたい 燈臺 (和名)十二本朝式云主殿寮燈臺(源 浮舟)六十むづりきなくかどや

りておどろくしうひとさびあもあさ、め燈台の火よやき水よかけいれさせ

かどやうく失ふ(枕)九、凡帳のうしろまたてさる灯さいのひりもあらひかり

ととりきたうさい(枕)廿七ととりきとうさいは火をありくか、けてたりとうさい

(盛衰)廿夜討の段山本館 高灯さいは火白くかきさてとり(補)うつろ 樓上)廿二と

うたいの火れありきよ(落くろ)一とうさいは火ともさせて

とろあき 無動(源 あう)廿身の不どのいとどろりひをけむ中く世もあるものと

とづねり給ふよつけて涙ぐまれて更例のとうあきをせめていひれて(抄)返事を

ならぬ也。どうもかく(同)と、き、(四)心もささぎていたひきされどどうもかくておくか

るおまゝ入り給ひぬ(孟津)源の動轉なくて也。皆うごきげもあきといへる類語也。

どうぐう 東宮春宮(源 桐壺)廿六春宮の御元服(枕)廿六春宮の御使(云々(有職雜問答)一

東宮の皇太子の御身の上を書申候時東宮とかき申候春宮の坊は奉仕の傅大夫亮進

等の役人官名をかくし申候二字共は同心にて候(云々)

どうで 取出(とりいづ)の所(附)と

どうざい 東西(どうざい)あらは(西モ東モ前ヌシラ)うつ(國ゆつり)下(下)まうでこん(五)せ

るをささりあいのけあがりてどうざいいらせかん(同)十六内より只今まりで侍り

てとさり心ちどうざいいらせ侍りて今ためらひて只今と聞え給へ(是ら病ヌ)どうざ

いをさせせ(枕)四(千)使(た)袖をとらへてどうざいをさせせこひとりもてこせバ

云々(抄)東西(身)ゆるぎもさせ(返事)とり来れと也

どうぎやう 同行(もろとも)修行(新古)別(ひとり)具(さる)同行(云々(著聞)廿一

の上人西住秋の頃煩ふ事ありて(云々)圓位法師哥(云々)

どうきやうき(源)七(からの)どうきやうきのこと(と)い(き)ま(さ)る(と)

ねま 注 東京錦

どうしん 等身(榮衣の玉)二 等身の佛(ち)せりせ(あら)は(させ)給ふ(更)一(お)日

記)どうしん(よく)佛を作りて(人の身)と(け)等(作る)を(い)ふ

どうしゆく 同宿(一つ)お(居)る(盛衰)廿(四)南(都) 同宿(十二)人(左右)の(さ)ま(立)て(云々)同

宿もあま(と)打(と)られて(云々)

どうしん 燈心(和名)十二考聲切韻云(炷)和名(度)宇(之)美(燈)心(音)訛(也) 燈心也(榮)こ(ま)く(ら)へ(十)油(と)う

いと迄もての(せ)給ふ(赤染集)五月五日(か)さ(ら)ふ(人)の(も)と(よ)り(く)を(玉)を(お)こ

はとて「いつとでもこひぬ(い)か(い)け(ふ)い(と)か(く)と(さ)り(り)の(あ)や(め)も(見)よ

うへ」 どうしんの(ね)い(さ)る(が)こ(と)は(か)ぐ(ら)ね(バ)「(れ)を(と)く(い)か(ぐ)く(ひ)け(り)あ

やめ草(ね)を(り)へ(て)さ(へ)を(と)り(き)や(か)ぞ

どうぞ 動(ず) どう(と)て(枕)廿(五)神(も)也(雷)お(ど)ろ(く)う(か)り(た)れ(バ)云々(どう)と(て)云々

の意也(抄)どう(せ)ら(る)の(前) どう(か)き(に) (源)總(角)廿(引)う(で)り(つ)バ(り)聞(え)あ(へ)る(も)い

と心(う)く(う)と(ま)う(て)どう(せ)ら(れ)給(ひ)せ

との 殿(貴人)の家(を) (和名)二(殿)止(乃)紫(宸)殿(仁)壽(殿) 云々(但)禁(裏)を(内)殿(上)又(大)方(さ)ま

よどの(内)閣(也)下(と)の(み) (と)の(で)も(る) (と)の(み)り (あ)ど(未)に(万)十(八)等(能)の(さ)ち(バ)を(同)同

とのさて、わこのの 不そこの くらこの つりこの よこの のぶぐひ上のか (いせ

物) 八段加茂川のそとりよ六條さより家をいと面白くつくりてそみ給ひけり 云々

此殿の面白きそむる哥よむ(落く不) 一殿のいと遠くあり侍りぬ行さ死のいと近

く猶おそいふんといへば(源 桐壺) 卅里のとののそりいきたくそづりさよ宣言下り

てよあうあらさめ作らせ給ふ(同 帝木) 四十ののよりへり給ひてもとのづくり 殿造

(催馬樂) 此殿 「此とののうべもとそけりさきくさのこつむよつをよとのづくりせ

り(源 みをつくし) 九心やまきとのづくりして(同 さむらひ) 十見もいらぬさまよ

目もか、やくこ、ちるる殿づくりのこつをよつをさる中よ すべて家づくりは同

とのうつり 殿移。家うつりも同 (同 玉葛) 初 此殿うつりの數の内よのまより給

ひかまゝ 〇とのびと 殿人。御館の人。召つうける、をも又門下は同家人もうよひしていへり (源す

ま) 廿國のかきもまこさきとの人おれば忍びて心よせつうらまつる(同 總角) 七十と

のびとあまゝ参りつとひかみゝもの人たちささきこれ(注 薫の京の(狹) 四下さふ

ろふ女房かともそりくくあらねばまいてとの人かどのとまらせ給ひぬるもえ

いらざりけり(榮 さまく) 一此殿の也 殿上いと物ぎよくきら、りよせさせ給へり

ととの人も何事よつけても心ことよ思ひ聞えさり

との 殿。是の貴人をさして申す貴人の御身をさ、ん事のオツレ多ケレバ敬一憚りて

もろれより下ぎまのもの、敬して猶どのといへ。又宇治拾(盛衰) などの頃、夫をさして

り後々の位たり、いらぬ主君の事をもまのいへり。いへり俚言よトノゴどもトノともい

へるが(源 蜻蛉) 卅いとけざりくおのける殿を(枕) 十一殿をさす(枕) 十二殿をさす奉り

て殿上と地下と皆参りぬ(同) 三、除目よつりさえぬ人の家 云々 殿の何より

からせ給へるあと問ふ(受領をのぞむ人) (盛衰) 廿ノ四段郎 殿を見えて、家安が生の

こりて、何よりせん 主の真田(宇治拾) 六ノ廿、僧伽多をさして 殿のおおと心よもお

やさぬよや迪さめととなくとのして(盛衰) 十八初段祐親の娘のいつき娘のやん

ごとかき殿してまうけさるをささき人よといひけき(殿) して(大和物語) 又男した

く夫モチテ男コ(補) (源 竹川) 六 かんのもいふ 玉葛をけよこそめやまけきかどの給ひ

て(同 紅梅) 五 かんのもおぞいさり 是も玉うつら(枕) 一條殿のもとよとめて

侍從殿やおそいませ(同) 内大臣どのいさとう心まうけさせ給へり〇此以下 貴人の

いふよ及ばずい人も敬 とうのとの 頭の殿 (枕) 四ノ十三とのも 頭の殿の聞えさ

せ給ふかり 頭の中將 北どの(源 タウヤ) 十八、賤 北どのこそ聞給ふや 北どなりの賤

關白どの(同) 十一關白どのその御次の殿から 云々 大納言殿 云々 大將どの中將殿な

駿河どの(狭)下廿七とありの乳母ういつりてとのをら殿の意也も出す。是のよりなへてうよひて位の淺き者をもいへり下りての世より郎等などを(枕)十一又此殿ばら立給ひて大納言伊周公同五殿ばらの四位五位六位も(和訓栞)殿腹の義宮腹かといふごとく大臣の室の腹ある君さち姫君かどをもといひを後より常の男子をいへり此説けいかかぬひがこと也宮のら二様(補)著聞(十七)殿ばらめんく狸をあつめ給へ

とのへ外重九重の重むて宮城のソト(古)忠岑とのへもる身の御垣もりをさくくもおもやえぎ左右の衛門府の内新六帖六家ろくきもりとのへよとてあるあふち陰いさふとされし道ぞ忘れぬ同一ふとさけてされいそぐらん九重やとのへよつもる雪のふり沓(同)信實二とのへ見ればふるきとりきの瓦ぶきかいらぬ御代よまよめぐる也(万)三五外重立候内重よ仕奉(延喜式)凡中重庭者須令諸司毎晦掃除年中行事哥合四十八番忠頼わきてされ仕ふる人の中のへ牛の車をりけているらんありのへうちのへ相むくへ補(拾愚)上も、いさのとのへをいづるよひく、いまさぬまむりふ山のもれ月續拾冬如願「いさづらよことくもくれぬとのへもる袖のこやりよ月をりさねて

とのる后女御の帝よ添ふし給源桐壺九御門せんりさかうかかいうおぞさる、ふをいふ次のと同意也

よ御りさとの御とのるかともたえてし給抄女御更衣たちの帝へ御替参り給ふ事也

とのる常いふどのる也夜の古言梯(和訓栞)あどみとのいとせる誤り也寐る義番をいふ殿居の意也

も君ませバとこつとかどと侍宿皇極紀二將侍宿(万)廿九「よそよみまゆとの岡

とよおひしとめての頃侍宿をるりも(長能集)左大弁のそとめの北の方の御も

とよおひしとめての頃侍宿をるりも(長能集)左大弁のそとめの北の方の御も

とのるどころ俗いふ夜源帚木三御むまこのきんさちさ此御とのる所の宮

づりへをつとめ給ふ(同)三殿上よもをさく人せくかよ御とのる所も例より

とやりあるこちをるよ(枕)九頭中將のとのる所よ(補)源藤裏葉九とのる所

ゆるし給ひてんや

とのるやつれやつれの意也新六帖信實「とのもりれとのるやつれの庭さちよ

姿りしとき朝ぎよめりか

とのるまう(源)夕の抄花鳥亥一刻よ内豎時の札を奏をその後侍臣の名

対面あり云々此次ま瀧口のとのる申ありとのる申といふも名調(延喜式)同上時奏

たびおとみ名とき奏とき申見るべし延喜式近衛府一凡行夜者内裏官人一

て大輔がもとよめてきこりけきり云々

○とのるもの、ふくろ 物の袋。いふ番袋也(河海抄)に殿上宿直人の名字書さる簡

號日給簡を納る袋歟 とるよりの給ひし大なる誤りあり前のとのるもの袋也(源さ

う死)六 さふらひよとのるもの、ふくろをさくこえは(經衡集)越中守とかり

と宇治殿までおき所夜ふしてとのる物をとりにへて袋あいて侍りけるりへ

そとて云々 補 とのるもの、ふくろ(河社)いへり

○とのるまがさ の姿。直衣衣冠の(枕草紙)の抄壺井ひのさうぞくと東帯の事也

宿衣直衣に對して晝の装束といへるよ昔の御ゆるしかくて宿衣直衣よての主上

の御前へ出仕侍らざる事也宿衣との衣冠の事也衣冠直衣とのるさうぞくと晴

よいあらざる也 以上。東帯は上袍は下襲あり下襲を除き(枕)五かまめりし物六位

の六位藏あぞいろのとのるまがさ(同)十五位も四位も云々うへのきぬの色いとき

よらよて革の帯のかさつきさるをとのるまがさ引こへて紫のさし貫も雪よを

えてこさまさりさるを着て 補 とのるもの(方)十二とのるもの雨ふる川のさ、れかままかくも君のおもゆ

るりも(同)十三みもろの神をひ山ゆとのるもの雨ふる川(同)四十五とのるもの

り雨のふる日をとがりそと(同)廿三あまれいら雲云々とれぐもりあひてあめもさ

まそね(同)此見ゆる雲をびこりてとのるもの雨もふらぬ心たらひよ

とのるもの 寐る事をかくもいへり、殿。御寝ナ おすとのるもの といへるも大殿油の大

添ふる也 お出す(うつろ)藏開(十八)よるもこかさよねなんとそれバ母をどり

あかこよいまうで給ぬこ、よとのるもの 云々 とのるもの (同)上十九

よ見給へかからばと聞えてとのるものぬ(同)國ゆつり(中)七十よるのこかさよと

のでもれ 轉してのこ其座 おすとのるもの へり(源若紫)七此ひさのうへ御との

でもれよ(枕)十六柱よよりか、りてをこいねふらせ給へる也 云々 今あけぬるよ

かくおすとのるものるべき事り(榮花山)十御けふそくよおすの、りておすよまを

ま、よやがて御とのるものりあけり あど 此とのるものも同例よて 補 (うつろ)樓上十九

とのるものぬ 云々 (同)國讓)中 みを御とのるもの

とのるもの 主殿。殿守の とのるもの といへるの音便。主殿寮の下司也次の宮人ミヤ。その

をさして とのるものりづりさ とのるものづりさ とのるもの 女官のと同例あるべし(新六帖)光俊との

もりの夜れみゆきよともを火のあきらけき世とかりよけるの とのるもの とのるもの とのるもの

みや人(堀川)頼「からかみよ袖ふるそどとのるものともれみや人御火白くさけ

增補雅言集覽卷之九
終

增補雅言集覽卷之九

終

